
時を嗤う少女

多草川 航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を嗤う少女

【Nコード】

N3739W

【作者名】

多草川 航

【あらすじ】

ある夜、ニュージーランドで暮らす日本人女性の家の庭先に瀕死の男が倒れていた。彼は何者？

数週間後……天空から裸女が舞い降り、世の中は騒然となる。

もし、この世界に居てはならない者たちが活動を始めたとしたら……？

物語は日本を含めた環太平洋を時計回りに展開します。

1・クライストチャーチ

過去数カ月間のあの信じられない事件の数々。それに対するヒカル・スカイファアの関わりはとても大きなものだった。世界中の誰よりも。

死にかけた若者との出会い。そして、未来から来たという少女との関係も誰よりも深かった。それは決して、ヒカルが望んで起きたことではなかったのだが。

2012年7月。ヒカルが仕事から帰宅するころには、郊外の彼女の家にも吹雪が近付いていた。

南半球のクライストチャーチ市の七月は、一年でいちばん寒い時季だ。

日本からニュージーランドに留学してから十年近くが経過したヒカル。その日は会社の同僚達と二十五歳の誕生日を祝い、帰宅した。

吹雪のせいなのか、いつも聴いているラジオ電波の受信状態が悪

くなっていた。電池を入れ替えて、あらためてスイッチを入れてみたが、ヒカルの願いもむなしく受信状態はよくならない。

溜息をついて、スイッチを切った。

寝るにはまだ早かった。テレビをつけて見たが、強風のせいで映りが悪かった。すぐに消した。

なにかしなければと思いつつも、なにをしたらいいのかわからず、所在なく居間の中をうろついた。

そこへ突然の雷鳴。少し離れたところへ落ちたようだが、ヒカルが身を固くして立ち止まるほど大きな音だった。かん高い風の悲鳴も神経に障るようになってきた。

風呂に入ったら気が静まるかも知れない。ヒカルは着ているものを脱ぎながら、階段を上がった。

居間の暖炉の熱気が上階に上がっていたので、早くも二階は暑くなりだしていた。ドアが開きっぱなしになっていたせいで、寝室までホカホカだった。

髪を頭のとっぺんにとめ、シャワーではなく湯を張ったバスタブに入ると、柔らかな照明の光が体の上で躍った。

湯に浸かった裸体がきらめいている。ランプの光だと目を疑うくらい、いつもと違って見えた。丸みが強調されて、影の部分は、より沈む。

胸は大きいと言えるほどではないが、いつもより豊かに見えた。位置が高くて形がいい。

日本人にしては悪くない体だと、自分で思っていた。お腹はペツタンコで、お尻は見事なほどふくよかだ。

この体で二年もセックスから縁がないなんて、誰も信じてくれな
いだろう。だが、すぐに顔をしかめて、その考えを頭から追い払っ
た。

夫のハリソンが生きていた時には、彼とのセックスに歓びを感じ
ていた一方で、それが出来なくなった今でも、性欲にはあまり苦し
められていない。

最近は多少感じるようになったけれど、欲望を持て余して困ると
ころまではいかなかった。

目を閉じ、後ろに倒れて、すっぽりと湯に浸かる。

ただ、赤ちゃんは欲しかった。なぜなのか、ハリソンとの間に子
供は授からなかった。

短い自愛を置き去るように、ヒカルはさつと体を起こし、足の指でバスタブの栓を抜いた。立ってツァワーの蛇口をひねって、憂鬱を洗い流してから出た。

肌触りのいい厚地のフランネルのパジャマに袖を通し、そのぬくぬくとした心地よさを味わった。フランネルのパジャマには、寒い日に飲むスープと同じで、よしよしと頭をなでられるような安らぎがあった。

歯を磨いて髪を梳かし、顔に化粧水をつけて、極厚の靴下を履くと、だいぶ気分が良くなった。あとは吹雪に負けないようにするだけだ。

階下で電話のベルが鳴っていた。

ティムは階段の下に寝そべり、ヒカルが戻るのを待っていた。尻尾を振って歓迎してから、最下段の前で伸びをした。ヒカルは跨ぐしかなくなった。

「どいてくれたっていいのよ」と、愛犬に言ってみる。

ティムは、ハリソンが亡くなって暫らくして、寂しさを紛らわすために友人から貰い受けた。今のうちに、時どきはこちらの意向をほめかしてみるが、一度としてティムに通じたことがない。

暖かい二階にいた直後なので、居間は凍えそうに寒かった。暖炉の薪をひと突きしてから、受話器を取り上げた。

途端に、同僚のケリー・ウィルソンの賑やかな声が飛び出した。

「ヒカル！？ あなた、携帯電話を会社の引き出しに忘れて帰ったでしょう。何回掛けても出やしないから……」

「あら！」

暖炉脇のテーブルの上に置いたバックの中を探った。

「こつちにあるわよ。引き出し、鍵が掛かっているけど、鳴っていないから間違いないわ」

「それでわざわざ？　なんてことはないわよね。用件は何かしら？」

「吹雪が近付いているから、状況によっては明日の出勤は無理しなくていいって、ボスから伝言よ」

「分かったわ、ケリー」

台所へ行き、ガスコンロでホットチョコレートをつくった。ホットチョコレートはハリソンも大好きだった。

読みかけの本をかかえて、長椅子に落ち着いた。背中にクツションを敷き、脚の上にも一枚投げてやると、申し分のない寛ぎの場が出来あがった。これで心地よく、満ち足りた気分で読書に没頭できる。

やがて、夜も更けた。うたた寝から目を覚まし、暖炉の上の時計に目をやった。十一時少し前だった。もちろん夜の。ベッドに入る時間だ。

でも、また横になるために立ち上がって、二階へ行くなんて何だかバカみたい。

とはいえ、弱くなっている暖炉の火の面倒をみるため、どっちみち立ちあがるしかなかった。欠伸をしながら薪を二本くべて、様子を見に近づいて来たティムの、耳の後ろを搔いてやった。

すると、ティムは体をこわばらせ、耳をぴんと立てて喉の奥から唸った。窓辺に寄るや、その前で吠え出した。
何かが外にいるのか！？

こんな強風のなかで、どうして物音が聞きとれるのか分からないながら、ティムの感覚の鋭さは信頼していた。

寝室のテーブルの引き出しに拳銃があるが、二階まで取りに行くより隣室にあるハリソンが残した猟銃のほうが手っ取り早い。

床を滑るようにして部屋に走り、押し入れの中の猟銃を掴んで、その下の棚から弾薬の箱を手についた。両方を持って灯りのある居間に戻ると、弾を五発詰めた。

風とティムの咆哮とで、それ以外の物音が掻き消されている。

「ティム、黙って！ さあ、こっちにいらっしゃい」

不安げに窓を見ながら太腿を叩くと、ティムはテクテクと歩いて来て隣に立った。

頭をなで、小声で褒めてやっても、すぐにまた唸りだす。筋肉を張りつめて前に飛びだし、ヒカルの脚を全身で押した。

え！？ 今、外で音がした？

耳に意識を集め、ティムを叩いておとなしくさせると、首を傾げて音を聞きたろうとした。

吹き荒ぶ風の音。

頭を働かせて、可能性を探った。なにかの動物か？ もしかして

狼か？

人間や人家をできるだけ避けようとする動物だが、猛吹雪のせいでやけを起こし、内気で警戒心が強いという本能に反して、避難所を探して迷い込んだのかも知れない。

かたわらのティムがドアに駆け寄り、ふたたび狂ったように吠えた。
だした。

動悸がして、手が汗ばんだ。パジャマで手の平の汗を拭い、猟銃をしっかりと握りなおした。

「ティム、静かにして！」

犬がその声を無視してさらに激しく吠え、続いて窓がしなるほど大きな音がした。
突風なのか？

「ティム、黙りなさい！」

怒鳴りつけると、その勢いに押されて、いつとき犬が静かになった。猟銃を構えて、ドアに寄った。

「誰か、いるの！？」

声を張りあげた。呻き声らしきものが聞こえたような気がした。

「まさか」

とヒカルは呟き、猟銃を片手に持ちかえて、ドアの鍵に手を伸ばした。

こんな天候なのに、外に誰かがいる。幹線道路が遠いために、その可能性は考えもしなかった。

こんな空模様のなか、車という拠りどころを離れたら、この家まで辿り着けるわけがないと思っていた。

ドアを開けた。先ほどまでの雨でどろどろとなった庭に、大きな物体が横たわっていた。

「ひっ」と、ヒカルは声を上げて後退りした。

床一面に雪が吹きこんだ。氷の息が吹きこまれ、室内の熱が奪われていく。吹雪が舞う中、それは人だと分かった。ヒカルは猟銃を脇に立てかけてから庭へ降りた。見ると、それは男のようだった。

外は寒いなんてものではなかった。男の体に触れてみたが、すでに冷たい。もう手遅れなのかも知れないが、このまま放って置いたら確実に、男は凍え死んでしまう。

彼の体の下に手を入れて抱え上げようと試みたが、さすがに無理だった。両手を引っ張り、足を踏ん張って室内まで引っ張り込んだ。

風は想像を絶する冷たさで吹き荒^{すさ}んでいる。傍らのティムは案^さじ顔で、吠えながら前足を突きだしたが、やがてクンクンと啼きだした。謎の人物の匂いを嗅いで、ふたたび唸った。

ヒカルはもうひと頑張りして、男をさらに居間の中ほどに引き入れた。ゼエゼエ言いながら床を這い、風の圧力に苦勞してドアを閉めた。

閉めだされた風が激怒しているかのように襲いかかり、ドアは猛攻撃にさらされて震えていた。なんとか鍵をかけてから振り返り、あらためて男を見た。

男は警官だった。制服は濡れて汚れて、生地がガチガチに凍っていた。危ない状態のはずだ。急いで男の脇に膝をつき、凍りついたような手をさすった。

「わたしの声が聞こえる？」と呼びかけた。「ねえ！ 返事して！」

だが、返事はなかった。ぐったりとして、震えてさえない。いい兆候ではない。

タオルで目元の泥を払ってやった。皮膚は青白くて血色がなく、唇は紫色に変色していた。指が凍傷になっているかどうか調べている暇はない。早く体を温めてやる必要があった。

ヒカルは苦勞して男の制服を脱がせた。それは凍りついて引き剥がす感じだった。下着は……驚いたことに下着は上下とも着けていなかった。

銀色の鎖のネックレスが首に巻き付いて、首の後ろに回っていた。

それにしても、猛吹雪の中をよくここまで来たものだ。たどり着けたのは奇跡か、はたまた幸運以外のなものでもない。どう考えても、普通なら凍死している。

そして、ヒカルが彼を温めてやらなければ、確実に死ぬかもしれない状態にあった。体中の泥や水気を拭いた。なにかで体を包んでやる必要があった。

一階のバスルームに走って手あたりしだいにタオルをつかみ、ベツドから毛布を剥いだ。

急いで引き返すと、男は床に転がったままで動いていなかった。床の水溜まりから引っぱりだして手早く体を拭き、毛布を床に敷いて、その上に体を転がした。さらに全身を包み、暖炉の前に引っ張っていく。

犬は寄って来て鼻をつけるとクンクン嗅いでから、彼のとなりに横たわった。

「いい子ね、ティム。温めてあげて」
ヒカルはティムに囁きかけた。

筋肉の使いすぎで手先が震えだした。だが、台所に走ってガスコンロで沸かした湯の中にタオルを突っ込んだ。

取り出したときには、持つのがやっとくらい熱くなっていた。
かけ足で居間に戻り、蒸しタオルで男の頭を包んだ。

それからヒカルは覚悟を決めて、自分が着ているものをすべて脱いだ。

早急に温めてやれるかどうかに、彼の命がかかっていた。残っていた毛布を掴み、ホカホカになるまで暖炉にかざした。

男を包んでいた毛布を開き、温まった毛布をかけて冷たい足をくむと、隣に体を滑り込ませた。低体温には人体で温めるに限ると聞いたことがあった。

冷たいからって怯^{ひる}んではいけない。ヒカルは男の体に、自分の体を押しつけた。

「ひっ」

と思わず声が出て、凍えそうなほど冷たかった。

男の上に乗って腕を巻きつけ、温かい顔を彼の顔にくっつけた。腕と肩をさすり、男の手をふたりの体の間に挟んで、ぬくもりが戻るまで耳を手で包んだ。

さらに両足を上下させて男の脚を擦り、冷たさを追いやって血を通わせた。すると男が呻いた。開いた唇から僅かに聞き取れるくらいの囁きがもれた。

「その調子よ。さあ、目を覚まして！」

呟いて彼の顔をなでると、伸びた髭が手の平にあたった。唇の紫が薄らいできていた。

そのころには、男の頭に巻いたタオルが冷えていた。タオルをはずして、毛布から出た。台所に走って湯で温めなおしていると、自身の素っ裸の体からあつという間に温もりが奪われていった。

居間へ取って返し、再度、男の頭に巻きつけて毛布の中に戻った。

ヒカルに比べて男は上背がありすぎるので、一度に全身を温められない。まず自分の体を下にずらして、足で彼の足を温める。足の指を絡ませるうちに、体温がいくらか移った。再び体をずらし、彼の上半身に乗った。

大きな体だ。一メートル九十はあるだろうか。硬い筋肉質の体。この際、熱を発生させる筋肉が多いのは悪くない。男の体が震え始めた。

ヒカルは男に小声で話しかけ、喋らせようと試みた。ある程度、意識が戻ってコーヒーを飲ませることが出来たら、その熱とカフェインが効いて目を覚ます筈だと考えた。

だが、昏睡状態の人間に対し、下手に熱いコーヒーを飲ませるのは、かえって窒息させ、火傷させてしまう。ここは慎重でなければいけない。

男は再び「ウーン」と唸り、引きつったように息を吸うと、頭を振ってタオルを落とした。熱で乾いた黒っぽい髪が、暖炉の火に照らされてブロンズ色に輝いている。

ようやく戻った貴重な体温を逃すわけにはいかない。ヒカルは頭

をタオルで包みなおし、額と頬をなでて囁いた。

「起きて！ 目を開けるのよ。声を聞かせて」

安心させようとするあまり、知らず知らずのうちに赤ん坊に語りかけるような口調になった。

耳慣れた甘い声を聞きつけて、ティムがピンと耳を立てた。ティムは男の足元に移動すると、寄りそうように腰を下ろした。

厚い毛皮を纏っているの、毛布越しに伝わってくる冷たさが心地よいのだろうか。あるいは本能のままに、男を温めようとしているのかも知れない。

ヒカルはティムにも、「いい子ね」と話しかけた。

軽く断続的な身震いは、しだいに激しさを増していった。男の肌はあわ立って、歯の根が合わずにガチガチ鳴っている。体は震え揺さぶられ、筋肉はねじ曲がった。

ヒカルは痙攣する体を支えた。

男は苦しんでいた。意識はほとんどなく、呻きながら荒い息をしている。丸まろうとする体を、ヒカルはしっかりと抱きとめた。

「大丈夫よ」

引きつづき語りかける。「さあ、起きて！ 目を開けるの」

反応があつた。薄く持ちあがつた瞼の下から、焦点の合わない、どんよりとした目が現れた。瞼はすぐに閉じ、黒っぽい睫毛が頬に影を落とすや、今度は腕を持ちあげて抱きついてきた。

自分では如何ともしがたい震えが、新たな波となつて押し寄せ、温もりを求めて無我夢中でしがみついてくる。

強張つた全身は、ガタガタと震えていた。力強い腕が鋼のようなベルトとなつて、ヒカルの体が締めあげられる。小声であやし、肩をなでて体を寄せると、男の体温が確かに感じとれた。

男の体を引きずり、大きな体を反転させた重労働の疲れに加えて、ヒカルの体は『温めてやらなければ死んでしまふ』というストレスが重なっていた。

毛布に包まれているせいで、汗ばんできている。震えの発作が収まると、男の体から力が抜けた。

しきりに息をした。腕を動かし、脚をばたつかせ、頭からタオル

を振り落とした。うつとうしいのだろうか。

そこで、頭に巻くかわりにタオルを折りたたみ、男の頭を持ちあげて、堅い木の床との間のクッションにした。

男がまだ冷えきっていて、急を要する状況だったときは気づかなかったが、いつしかその裸体がもたらす感覚を意識していた。

上背があって体格がよく、さらに硬い筋肉に包まれた胸。それにゆがみと青白さが取れると、顔立ちも悪くない。胸の筋肉が盛んに動くために、ヒカルの胸も疼いた。

そろそろ体を離すべきなのだろう。そつと男の体を押し起こそうとすると、男は呻き声をもらして、さらに抱きついてきた。

また震えがきている。ヒカルは体から力を抜いた。今回はそれほどひどい震えではなかった。男は唾を吞んで唇を舐め、うつすらと瞼を開いて、すぐに閉じた。うたた寝しているようだ。

もう体温が戻ったので、心配はいらないだろう。ヒカルの筋肉も疲労して、別の意味で震えている。

ちよつとだけ休もう ヒカルも目を閉じた。

2・目覚めた男

馬が暴れて大きく立ち上がった。後ろからハリソン・スカイファ
ーの左手がヒカルの腰を強く抱え、彼の右手は手綱を握ったままだ
った。

ヒカルはいきなり大地がひっくり返ったかと思った。

藪から現れた猪が一声啼いて反対側の藪へ消え、走り去るハリソ
ンの愛馬の後ろ姿が見えた。ヒカルの下敷きになった彼がピクリと
も動かない。

ハリソンは後頭部を強打していた。

翌日、親族が見守る中、彼は亡くなった。

以来、ヒカル・スカイファアはクライストチャーチ郊外の自宅で、
ひとり暮らしを続けて来た。ただ、その時からヒカルは記憶の一
部をどうしても思い出せないでいた。

特にハイスクール時代のことだが、現在の日常にさしたる問題が
なかったためか、それほど気にする様子もなかった。

どれくらいの時間が経っただろう。夢にうなされ眠りから覚めたが、まだ半分眠っていたヒカルは、温かいが疲れて体が重く、眠ってから一分なのか、一時間なのか分からなかった。

男の手が下に動き、彼女の片方のお尻の丸みに添えられた。そして、彼女の下にいた体をずらし、引き締まった脚を動かして太腿に割って入ってくる。

暖炉の火に照らされた彼の顔を見た。開かれた目は青く、茫然としているようだった。まだ意識が肉体に向いているせいなのか、顔が陰しい。

純粹に動物としての本能に突き動かされ、間近にあった彼女の肉体に 彼の命を救うために必要だった裸体の近しさに 性欲をかき立てられたのか。体が温まり、生きていると実感したとき、腕のなかには裸のヒカルがいた。

そういうことだった。

男は体じゅうの筋肉をひくつかせている。鼓動が速く、息遣いは荒かった。

だが、あろうことが、男はそのまままた寝入った。なのでヒカルは、この状態から逃れられなくなった。

上には、ぐったりと重い体がある。手を伸ばして彼の頬に触れ、額の髪を押しあげる。あとは、差し迫った休息の欲求に身をまかせるしかなかった。

暖炉の薪が崩れる音で目を覚ました。ヒカルは身じろぎし、背中にあたる硬い木の床の感触に顔をしかめた。上からは男の体重がかかっている。

頭が混乱していて、最初は夢を見ているのだと思った。まさか、赤の他人と裸になって床で寝ているわけがないと。しかも相手まで、素っ裸なんて。

だが、いつもどおりの場所で寝息をたてるティムを見て、我が家に居ることを再認識した。

風の唸り声と、静かに揺らめいている暖炉の炎で、此処クライストチャーチ一帯^{いったい}を飲み込んでいる吹雪のことを思い出し、すべてが正しい位置に収まった。

彼が起きていることに気づいたのも、やはり突然だった。身動きひとつしないが、体じゅうの筋肉をこわばらせていた。

ヒカルが混乱しているくらいだから、彼のほうは尚更だろう。男の背中にそつと手をやり、そこに広がる筋肉に手のひらを這わせ、呟いた。

「起きているわよ」

その呟きと手があれば、彼女が自分の意思でこの場にいるのだから、心配はいらないのだと伝わるはずだ。

男が頭を上げ、ふたりの目が合った。青い瞳を覗き込んだとき、驚きに息が止まりそうになった。完全に覚醒した目の奥には強い個性と、状況を把握しているらしい煌めきがあった。

ヒカルは赤くなった。頬が火照って、呻きそうになった。こんなかたちで初めて会った男に、なにを言えればいいの？

彼はヒカルの裸の腰を指先でなぞり、そつと頬をなでた。

「やめようか？」

と囁き声で尋ねてきたが、ヒカルにとってその言葉は、もうひとつの混乱の元だった。

なんと彼は、日本語で語ったのだ。

その風貌や体格は明らかにアングロサクソンそのものなのだが、流暢な日本語だった。

暫らくは青い瞳を見詰めたままで、彼女は身じろぎも出来ないでいた。だが、今の二人は自分たちのしようとしていることを完全に理解している。

分析も自問もせずに、
「いいえ」と、ヒカルも日本語で囁き返した。「やめないで」

彼が唇を寄せてきた。ふたりの間には何ごともなく、優しく、探るようなキスだった。

ヒカルも熱心に求めに応じ、舌と舌が絡まった。キスや手の感触や、なでられる感覚のひとつずつを、貪る^{むさぼ}ように味わった。

彼にむしゃぶりつき、愛撫し返し、自分が感じている歓びのいくらかでも感じさせたかった。

彼が呻いているところを見ると、願いは叶ったらしい。

そして、優しい愛撫を必要としない時がやってきた。絶頂へ至る激しい身体の動き以外、なにもいらなかった。ヒカルは迫りくる瞬間に我を忘れ、快感の高波に身を投じた。

やがて荒波が過ぎ去ったあと、暖炉の火がまた二人を眠りへと誘^{いざな}った。

メールのやり取りで知り合った部屋主の名は、中野舞子といった。アパートのオーナーは最上階の八階に住む中国人だと知らされていた。

舞子は急の用事があって、その日の午後に日本へ発つが、二週間したらまた戻ってくるから、その時に一部屋を渡したいと言ってきた。だから、よければ今日の昼にでも会って、部屋を見てから約束だけでも交わしたい、と。

公園の裏手で、市の中心街に近いこともあって、当時十八歳のヒカルはこの話に乗り気でいた。

アパートは一階が真つ赤な看板の中華飯店で、すぐに分かった。その横に階段があった。中野舞子の部屋は二階だ。

階段の下に立ったとき、上からドアの開く音がして、言い争う声が聞こえた。後ろ向きで出て来たのは男の人だった。

そのとき、ヒカルは彼の名を思い出した。ラザ・モーガン 彼
ももつじき卒業する。でも、そのラザが何故ここに？

そう思いながら、ヒカルは階段の中ほどまで上がっていた。

言い争いの内容は、ラザが交際の継続を望み、舞子は望まない。
そう、ヒカルは理解した。その時だった。

舞子の耳をつんざくような悲鳴が、階段に轟いた。ラザの右手に
ナイフがあった。

あっと思う間もなく、その刃先は女の胸を突き刺した。一瞬の
ち吹き出す血は、ラザの手や胸に飛び散った。

「きゃあー！」

ヒカルの悲鳴に、ラザが振り向く。血痕のついた恐ろしい顔で見
下ろしていた。

無意識にも意識するにも、ヒカルはその場を逃げ出そうとした。
バランスを崩して片足が滑り、その直後に体は落下を始めていた。

ああ、拙い！

そう思ったヒカルが覚悟を決めかけたとき、彼女の体が落ちた先
は堅い床ではなく、大きな腕の中だった。

頑丈な男の腕、分厚い胸の中に抱き止められた。その胸には白地に赤い丸をかたどったネックレスがさがっていた。

ヒカルは、男の興奮に呼び覚まされ、夢から覚めた。

「もう一度、きみがイクのを感じさせてくれ」

ヒカルが二度目の高波に襲いかかれたとき、男は抑えようのない深い声を吐きだして、震える体を彼女の上に横たえた。

今度ばかりは、眠りという贅沢に身をまかせなかった。彼はヒカルの手を探り、その指を手でくるんだ。

「なにがあつたのか聞かせてくれ、ヒカル」

男は低く淡々とした声で尋ねた。

いつの間にか、彼の言葉がブリティッシュ・イングリッシュに替わっていた。少し前に耳にした日本語は夢だったのだろうか？

ヒカルは咳払いをした。そして、そのことに気付いた。

「なぜ、私の名を？」

青い瞳が彼女の表情を探った。僅かに微笑んだ。

「外の郵便受けに……」

声を出さずに、ヒカルはそうなのと表情で返した。こんな目にあっても表札だけは確認してきたって言うわけ？

警官とはいえ信じがたい職業病だわ。

「わたしたち、以前どこかで逢ったってこと、ないわよね？」
と訊くと、彼は探るような目をした。ヒカルは重ねて尋ねた。「
あなたの名は？」

「俺は……」彼の視線が一瞬彷徨った。「テッド、テッド・パーカ
ーだ」

暖炉の火が弱くなってきた。薪を二、三本足してやらなければ
ならない。

上体を起こして片膝を立て、立ち上がりかけたが、そこでヒカル

は動きを止めた。今立ち上がって、下から見ている彼の目に裸体を晒すのは耐えられなかった。

股間に男の視線を感じて、彼女は膝を閉じた。

パジャマを探して周囲に目をやったものの、きまり悪いことに汗ばんでいて、シャワーを浴びないと着られない状態だ。

ヒカルの視線の先にあるものを見た彼には、傷つくほどの体裁がなかった。彼は立ち上がると、長い脚で薪の山まで歩き、暖炉にくべた。

ヒカルは自分がされたら照れくさかっただろうことを、彼に對してした。頭のとっぺんから股間にぶら下がったイチモツ、そして爪先まで、しげしげと観察したのだ。

だが、目に入ったものは、まるごとすべて氣に入った。

暖炉の照り返しを受けて、浮かびあがる筋肉の逞しさ。広い胸板、太腿に盛りあがった細長い筋肉。尻は丸く、引き締まっている。

テッド・パーカー……心のなかで彼の名前を繰り返す。力強さと潔さを併せ持った名前だ、などと勝手に解釈する自分がいた。年齢は自分と同じくらいに見える。

ティムといえば、眠りを妨げられて少し不機嫌そうだった。起

きあがつて新参者の匂いを嗅いでいたが、パーカーが腰をかがめて頭をなでると、大きく尻尾を振った。

「犬が吠えていたのを憶えているよ」

「わたしより先に、この子が物音に気付いたのよ。名前はティムよ」

「ティム、いい名だ。ティムティムチェリー？」

青い瞳に悪戯な表情を浮かべて犬の頭を撫でてから、ちらつと彼女を見た。

ヒカルはフツと吹き出した。

「いいえ、残念ながらその歌は関係ないわ。それに、ただの甘えん坊さんよ。周りにいるものは自分を可愛がるために存在していると思っっているわ」

「そのとおりかもな」

テッドは濡れそぼった自分の衣類の山と、床にできた水溜まりを見ている。「俺がここへ来て、どれくらいになるんだ？」

時計に目をやると、針は二時三十分を指していた。

「三時間半ね」

その短い時間の間に、あまりに多くのことが起きた。そのくせ、一時間かそこらしか過ぎていないような気がする。

「わたしがあなたを家に引き摺って入れて、服を脱がせたの。外は酷い吹雪だわ。なのに泥水に体を突っ込んでいたの。ずぶ濡れだったし、衣服は力チ力チに凍っていた。濡れた体を拭いて、毛布にくるんだわ」

「今はなにも思い出せない」

「よく此処まで来られたわね。なぜ歩きだったの？ 車はどうしたの？ 事故かなにか？」

「いや」

彼は首を傾げている。

「そもそも、なんでこんな時間に、こんな天気るときに外出したの？」

「そんなに一度に質問しないでくれ。今は思い出せないんだ」

「奇跡よ！ 普通なら間違いなく凍死しているわ」

「でも、俺はそうならずにすんだ。きみのおかげでね」

テッドは毛布に戻り、彼女の横に寝そべった。思いつめた目をしていた。巻き毛を手に取り、指の間に通してから彼女の耳にかけた。

「俺を温めるため毛布に入ったときは、俺が半分意識を取り戻すなり襲ってくるなんて、予想してなかったはずだ。正直に答えてくれ、ヒカル。きみも望んでのことだったのか？」

ヒカルは咳払いをした。

「そうね 驚いたけど」

彼の手に触れる。「でも、いやじゃなかった。あなただって、それは感じたでしょう？」

テッドはほっとしたように、一瞬目を閉じた。

「きみの体の上で目を覚ますまで、記憶が混沌としてるんだ。とい

うか、自分が何をして、何を感じたかは憶えているが、きみも同じように感じていたのかどうか、分からなかった」

開いた手をヒカルのお腹に置き、上に滑らせて乳房をおおった。
そして続けて言った。

「ついに頭がイカレタかと思ったね。こんなに綺麗で、やさしい瞳をした、黒髪の女性が裸で隣に居たんだから」

「細かいこと言うようだけど、わたしが居たのは隣じゃなくて、あなたの上よ。最初はね」

また頬が赤く染まる　いちいち赤くならないで！　と己に言い聞かす。「あなたを温めるには、それがいちばんだったから」

「確かに効いたよ」

そのときはじめて、彼の口元に笑みが浮かんだ。ヒカルは息をす
るのを忘れそうになった。

彼はハンサムというより、魅力のある厳いかつい顔をしているが、笑顔を見た途端、心臓がでんぐり返った。

愛の化学反応ね、とぼんやりした頭で思う。

ハンサムな男なら大勢見てきた。夫のハリソンも端正な顔立ちの

古典的な美男子だった。

だが、見た目がよければ体が反応するとは限らず、どんな男性に對しても、これほど性的に惹かれたことはなかった。

もう一度、彼に抱かれたい。だが、その欲望に屈する前に、彼が身体を消耗する辛い試練をくぐり抜けたばかりなのを思い起こした。

「コーヒーを飲まない？」

慌てて尋ねて、立ち上がった。彼から目を逸らしながら、パジャマを回収した。

「それとも、なにか食べる？ 昨日大量にシチューをつくったのよ。熱いお風呂に入るのもいいかも。温水器だけは家の発電機につながっているから、お湯ならふんだんにあるわ」

「いいね」彼も立ちあがった。「どれもそえられる」

手を伸ばして彼女の腕をつかみ、自分のほうに向かせた。頭を下げ、今度も甘く、やさしく彼女の唇を吸った。

「それに、もし許されるものなら、また、きみを抱きたい」

人生には、こんなこともあるのね。ヒカルは彼を見あげた。
吹雪がつづく限り、テッド・パーカーは傍にいる。

「わたしもよ」

と、どうにか答えた。「今度は床じゃなくて、ベッドにするとか？ 暖かいのよ。熱が全部、二階に上がるから。でも、あなたを抱えて階段を上れなかったから、しかたがなく暖炉の前にしたの」

「文句を付けているわけじゃないんだ」

彼女の腕にあったパジャマをたぐり、床に落とした。「いま思ってたんだけど、コーヒーとシチューの件は忘れないか？ ついでに、風呂も。きみが一緒に入ってくれるつもりなら別だけど」

ヒカルは彼の胸にもたれ、すべてを頭から追ひ払って、ふたりの体が紡ぎ出す生々しい魔法にだけ心を奪われた。

3・あなたは何者

あくる朝、ヒカルは目覚めると横になったままで、まだ隣りで眠っている男を見つめた。

かつてないほど、体が満たされていた。名前以外ほとんど何も知らない男に、これほど夢中になる理由を問うこともなく、この出会いが運んできた喜びを素直に受け入れた。

熱い彼の体がベッドをぬくぬくとした巢に変え、床に下りたくなる。部屋が冷えきっているから、尚更だ。
どうやら、暖炉の火が燃えつきたらしい。

男のとなりに横たわり、ゆつくりとした深い寝息に耳を澄ませた。そこには、長いあいだ味わえずにきた素朴な喜びがあった。

彼に寄り添いたいけれど、起こすのはしのびない。疲れているのだろう。ぐっすりと眠っている。凍死しかけた直後だったのに、昨晚は体を休める暇がなかったのだ。

昨夜この近くで、彼は交通事故にでも遭ったのだろうか。
不思議なのはいま眠っていることではなく、夜の間あれほど活力に満ちていたことのほうだ。

見えている彼の体の各部分をひとつずつ確かめた。綺麗な髪。黒っぽくて豊かで、陽の下で長く過ごしているのか、ブロンズ色の筋が入っている。

こちらを向いている寝顔を見るうちに、自然と笑みが零れて、指で鼻筋をなでたくなった。

鼻は高くて少し歪んでいる。だぶん誰かに殴られたことがあるのだろう。警官の制服を着ていたから、職務上で乱闘を避けて通れないのかも知れない。

そう思ったあと、ヒカルは首を僅かに振った。この前見た、刑事もののドラマの影響かしら。

そういえば、この猛吹雪で停電になっているので、テレビで気を紛らわす時間も持てない。

ヒカルは男の目を見た。目は大きくて形がよい。唇は柔らかそう。下顎は角張っていて、顎先は頑固そのもの。

男前で厳めしくて、前に思ったとおり、所謂ハンサムではないけれど魅力にあふれている。

ヒカルは唇の間から、荒い吐息をもらした。

吹きつける風が、窓をガタガタ鳴らしている。ガラスの向こうにあるのは、視界をさえぎる白い幕だけだ。

吹雪が猛威をふるっている限りは、世間に邪魔されることなく彼を独り占めにできる。

いや、吹雪の中をこの男が吹き寄せられるや、一転して未来が輝きだしたようにさえ思える　もちろん、亡くなった夫には内緒だが。

それにしても、こんな吹雪の日は何処から来たのか、テッド・パーカー。このあたりに土地感がある地元人間なのか？

彼が目を覚ましたら尋ねてみよう。

昨晚、ふたりを結びつけた状況は極端なものだから、天気が回復し次第、彼は後ろも振り返らずに立ち去るかもしれない。

ヒカルはそのリスクを承知で、彼を受け入れた。

そう、自分の意志で、今の状況を招いたのだ。
ふたりの関係がなんらかの形で続くようなら、こんなに嬉しいことはないと思った。

ただ、“愛”という言葉は考えないようにしていた。きちんと知りもしない人を、どうやったら愛せるの？

夜が明けて頭が冴え、緊急事態のストレスがなくなると、罪悪感が湧いてきた。

彼が結婚しているか、どうかさえ知らない。既婚者と寝てしまったかも知れないと思うと、胸が締めつけられた。

彼が不実なロクデナシだと分かったら、どれほど傷つくか、想像しても恐ろしい。

彼を起こさないように、そっとベッドから抜けだした。

筋肉痛からなのか腿が震え、お腹の奥が痛かった。最初の二、三歩は歩くのがやっと。

長らく使っていなかった筋肉と皮膚が、前夜の扱いに抗議していた。

こっそりと衣類を集め、忍び足で部屋を出た。一階に下りると、台所からティムが小走りに出てきた。

跳びかからんばかりだから、ヒカルが寝坊したせいで腹を空かせているのだろう。

ヒカルはティムの食器に餌をそそぎ入れると、すぐに暖炉に近寄った。

室内は冷えきっていた。熾き火に焚き付けを近づけると、すぐに火がついた。それから薪を三本、注意深く火床に積み重ねた。

続いてコーヒーのポットを火にかけておいて、その間に一階のシヤワールームに入った。

お湯が出るって、なんてありがたいんだろう。そうでなければ、寒さに凍えていたところだ。

疼きと痛みを和らげるのに、シャワーは抜群の効果を發揮した。いい気分になったところで、スエットパンツにぶかつとしたフラインネルのシャツをはおり、厚手の靴下を二枚重ねにして履いた。

コーヒーを飲むため台所に向かった。家は暖まり、コーヒーは沸き、お腹は鳴っていた。

気になったので、確認のために電話の受話器に耳にあててみた。この天候で電話も途切れた。回線は通じておらず、何の音もしなかった。

ラジオのスイッチを入れたが、聞こえてきたのはまたも雑音だけだった。

そういえば猟銃は……昨夜置いたとおりにドアの脇に立てかけてあった。

それを回収し、奥の部屋のラックに戻した。放っておいたら、元氣いっぱいの子の尻尾にいつ倒されるか分かったものじゃないからだ。

「俺の気のせいじゃなきゃ、コーヒーの匂いがするぞ」

テッドが上の階の廊下から顔を覗かせた。あっちこっちへ向いた髪に、髭で黒ずんだ顎。目はとろんとして、声は擦れていた。風邪でもひいたのではないかと心配になるほどに。

「いま持つていくわ。裸で歩きまわるには廊下は寒すぎるから」

「じゃあ、ここにいるよ。いまのところ、まだ寒さに立ち向かう気力はないからね」

悪戯っぽくニタツとすると、傍らの犬を撫でた。ティムは新しい声を聞きつけるや、早くも階段を駆け登っていたのだった。

台所に戻り、カップにコーヒーをついで居間に入った。暖炉の火勢が戻ったおかげで、部屋はすっかり暖まっている。

テッドはというと、いつの間にか降りて来ていて、バスルームのドアを開けたままシャワーを浴びていたので、カップは洗面台に置

いた。

「コーヒー、ここよ」

彼はカーテンを開けて、頭を突き出した。顔に湯水が滴っている。

「こっちにくれる？　ありがとう」

そう言う彼にカップを渡すとごくりと呑み、カフェインの刺激に溜息をついた。

「お巡りさん。制服が乾くまで、夫の服を着ていてね。いいかしら？」

また、テッドは顔を突き出した。だが、無言で問うているような表情を浮かべた。

「わたし、夫に先立たれたの」

と、いったん黙る。「今朝、わたしもあなたについて同じことを考えてた。あなたが結婚しているかどうか、考えもしなかったって意味よ」

彼は小さく笑った。

「俺は独身さ」

もうひと口コーヒーを飲む。

「それで？ 何年きみは優雅な独身生活を送ってきたんだ？」
と、なにげない口調で尋ねた。

「二年よ」

テッドは彼女にカップを返し、笑顔になった。

「吹雪は、あと一週間は続くかな？」

ヒカルは声をあげて笑った。

「まさか」

「でもまあ、少なくとも今日は動けない」

「いま確認したんだけど、電話が通じなくなっているの」

「おお！　じゃあ、どこにも連絡できないのか。運命に呪われているらしい」

閉まるシャワーカーテンの隙間から、青い瞳の輝きが見えた。

「セクシーな黒髪女性と置き去りにされちゃったってわけだ！」

カーテンの向こうから、楽しげな口笛が聞こえてきた。わたしも口笛を吹きたい気分だわと、ヒカルは外の風音を聞きながら、彼が何日か足止めされることを祈っている自分に気付いた。

そのとき、ふと思い出した

「そうそう、訊きたいことがあるの。あなたの拳銃とホルスターがなかったわ。どうしたか憶えている？」

やや間があった。

ようやく聞こえてきたのは、水飛沫を顔に浴びながら喋っている声だった。

「知らず、知らずに吹雪のなかに落として来たのかも知れない」

「覚えてないの？」

あのような状況で表札を確認したと言っているのに？

「なんでガンベルトを外したの？」

「まったく、どうかしていたよ。で……ほかにも銃器はあるのかい？ 昨日見た猟銃のほかについて意味だけど」

「拳銃が一挺あるわ」

「どこに仕舞ってあるんだい？」

「寢室のサイドテーブルの引き出しだけど、どうして？」

「俺以外にも、吹雪に巻きこまれて避難場所を求めてやって来る奴がいるかも知れないからさ。用心するにこしたことはないだろ？」

テッドは、ヒカルから差し出されたスエットに袖をとおしたが、やや窮屈だと言った。

「じゃあ、もっと大きめのものを探してくるわね」

「何度も二階へ行き来させると悪いし、俺も行こう」

二人して寢室へ上がったが、どの服も似たりよったりで、結局は

最初のスエットの上下に落ち着いた。

その後、ヒカルは台所に入り、ベーコンと卵料理を用意した。

「コーヒート、ベーコンと、きみと。どの匂が一番いいのか分からない」

「感激だわね。コーヒートベーコンと同列だなんて。わたし、よっぽどいい匂いなね」

テッドは笑いながら、ベーコンを突き始めた。
擦り寄って来たティムの頭を撫でていた。

ヒカルは先ほど散らかした寝室を片づけに、二階へ上がった。

ハリソンの帽子がベッドとサイドテーブルの間に落ちているのを見つけて、膝について拾いあげたとき、ふと思いついた。

ちょうどその場にいて、先ほどのテッドの言葉を思い出したからだ。拳銃の所在を確かめておこうと思ったのだ。

サイドテーブルの引き出しを開けた。

だが、無かった。

のろのろと立ち上がり、空っぽの引き出しを見おろした。

そこに拳銃があつたのは間違いないことだった。それがいまは無くなっている。

問われるままに場所を教えたから、探すのは簡単だっただろう。

でも、どうして手元に置いておきたいと、率直に言ってくれなかったのか。

警官だし、丸腰よりも武器があつたほうが落ち着くことくらい、ヒカルにだって理解できる。

思案気な顔で、階下に戻った。彼は食べ終えていた。

「テッド、わたしの拳銃、持ってる？」

彼はチラッと窺うようにこちらを見ると、すぐにコーヒークップに目を戻した。

「ああ」

「どうして、言ってくれなかったの？」

「きみを心配させたくなかった」

「心配って、なにを？」

「前に言っただろ？　ここへやって来るかも知れない他の連中のことをさ」

「わたしは心配なんてしてなかったけど、あなたはしているみたいね」

と、手厳しく指摘した。

「武器を携帯していたほうが落ち着くんだった。きみが気に入らないのなら、あとで戻しとくよ」

ヒカルはあたりに目をやった。

「どこにあるの？」

「俺の腰のベルトだ」

なぜか、胸騒ぎがした。

一瞬、彼の表情が……強張り、余所余所しくなったように思えてならない。

たぶん職業柄、一般市民には夢にも想像つかないような場面に多く出くわす、最悪のケースを思い描いてのことなのだろうか。

でも一瞬、ほんの一瞬だがテッドの顔が、彼が闘っているはずの凶悪な社会のクズと同じように見えた。

ざつくばらんで親しみやすいという印象がつづいていただけに、その落差には愕然とするものがあつた。

ヒカルは不安感を振り払って、それ以上拳銃のことには触れなかった。

「それで、あなたはどこの警察署勤務なの？」

「ここさ」彼は答えた。「オー克蘭ドさ。でも、来てまだ日が浅いんだ。だから今まで、きみやティムにも会いにくるチャンスがなかったってわけ」

ふたりの椅子の間に寝そべっていたティムは、自分の名前を聞いて顔を上げた。

「あら！　ここはクライストチャーチよ？」

と言ってから、ヒカルは眉を寄せた。そして、テッドの横顔を見つめた。

彼はコーヒークップを空っぽにすると、テーブルに置いた。

「実は俺にはひどい悪癖がある」

急にテッドは告白に入った。

「そうなの？」

「リモコン中毒なんだ」

「……あなたも、その他二百万人のニュージージーランドの男もね。夫はテレビを見ると、リモコンを手放さなかったの」

「俺はそこまで重症じゃない」

ニッコリして向き直ると、彼女の手を取った。

「それで？ ヒカル。尋問はもういいのかい？ それより普段の生活に戻ったら、俺と食事に出かけないか？」

「さあ、どうかしら。デートってこと？　そこまでの気持ちかどうか、よく分からないわ」

テッドが笑い、なにか言おうと口を開きかけたとき、ふたりの手に陽射しがあたった。ふたりとも、ビククリして光を見つめ、窓に目を転じた。

風が止み、ところどころに青い空がのぞいている。

「おお！　なんてこった」

テッドは席を立ち、窓から外を見た。「もっと続くと思っていたのに」

「わたしもよ」

必要以上に失望が声に滲んだ自分に気付く。
相変わらず何者か分からないテッド。でも、さっき彼はデートに誘ってくれた。

天気が良くなれば、じきにいなくなるけれど、出て行ったからといって縁が切れるわけではなさそうだ。

ヒカルも窓辺に寄り、雪の量を見て息を呑んだ。

「なにこれ！」

吹き流された雪のせいで全体が一様にならされ、見慣れた地形が一変していた。ポーチには、窓の高さまで雪が吹き溜まっている。

「三フィートはありそうだな。スキー客目当ての宿は大喜びだろうが、除雪車で道路を通れるようにするには、しばらくかかるだろう」

テッドはドアに向かった。開けたとたん、室内の暖かさが外の冷気に吸い取られた。

「うわ！」ボタンとドアを閉めた。「マイナス何十度だか分かったもんじゃないぞ。これじゃあ、そろそろ雪も溶けないな」

おかしいことに、テッドはその後何度か窓から窓へと移動し、正面に立たないようにしながら外を眺めていた。

その間、ヒカルは忙しく立ち働いていた。天気とは関係なしに、家事が消えてなくなるわけではない。

テッドは彼女が手洗いた洗濯物を絞るのを手伝い、果敢にも寒い外に出て薪を運んで来た。

ヒカルのほうは洗濯物を階段から二階へ通じる手摺りに干した。暖炉の火を絶やさずにいたら、一時間もあれば乾くだろう。

二階の温度は三十度近かった。

彼は薪を抱えて戻ると暖炉の横に積んだ。

「出入り口の雪かきをしてくる！」

と、テッドは二階の彼女に叫んだ。

「もう少し暖かくなってからにしたら？」

「風は吹いていないから少しの時間なら耐えられるし、それだけあれば片づくさ」

そう言つと、重たいコートに袖を通して外へ出ていった。少なくとも、手にはハリソンの頑丈な作業用手袋を嵌めているし、ブーツは乾ききっていないにしろ、靴下は三足重ねている。

ティムはここぞとばかりに彼について行った。

天気が良くなったから、ラジオが聞けるようになっていたかもしれない。ヒカルは一階に戻り、ラジオのスイッチを入れた。

有難いことに、雑音ではなく音楽が流れ出した。歌声を聞きなが

ら昼食の準備をしようと、床下に仕舞っておいたビーフシチューを取り出した。

昨日今日は天気が重要なニュースなので、一曲終わるなりアナウンサーが通行止めになった道路を列挙し出した。

耳を澄ませていると、家に通じる道は通行不能で、付近の道がすべて通行出来るようになるには、最低でも三日かかると交通ニュースは予測していた。

郵便サービスは一部地域のみ。電気やガスといった公益事業の作業員は、サービスの復旧をめざして懸命の作業にあたっているらしい。

次のニュースは、ここクライストチャーチからずっと北にある、オークランド支局からのものだった。

ノースアイランド・ノースショアの景勝地で、岬の上空から舞い降りて来た人影の話である。

「その人影は岬の先端の灯台を背景にして、雲間からふわりと降りて来たそうです。そこにたまたま居合わせたカップルが、それを写真におさめようと思いました。」

でも、カメラに目を逸らした僅かなあいだに人影は姿を消しました
……これ、どう思いますう？」

この若い男女の目撃談は、ローカルニュースのコーナーで面白おかしく語られた。

だが、次のニュースを聞いたとき、ヒカルはその場で固まった。

4・怯え

「もうひとつ、ニュースが入って来ました！」

と、アナウンサーは続けた。

「三人の服役囚を移送中の車が、吹雪のなか幹線道路でスリップ事故を起こした模様です。この事故で、三人の警官が死亡。二人の服役囚が逃走しました。」

猛吹雪のなかで生死は確認できていません。この逃走中の服役囚のうち一名は極めて危険とされる人物ですので、不審者にはくれぐれもご注意ください……」

胃がずしりと重い。

ここから幹線道路までは、一マイルしか離れていない。

手を伸ばして、ラジオを切った。アナウンサーの声が急に神経に障ったからだ。

考えなければ。

困ったことに、今、頭にあることだけでも熟考するのも怖かった。

テッドは何故、警官の服装なのに拳銃を所持していなかったのだ

ろう。吹雪の中、意識が朦朧としていたとはいえ、ガンベルトまで捨てて来たのはどうということだろう。

しかも、今はヒカルの拳銃を所持している。
だが、まだ猟銃がある。

ヒカルはシチューの鍋を置き、奥の部屋のラックの猟銃を手にとった。頼もしい重みに安堵の溜息をついたが、薬室を見下ろして愕然とした。

中は空っぽだった。きっと彼が弾を抜いたのだ。急いで弾薬を探した。どこかに隠してあるはずだ。

持ち歩くには重すぎるし、彼が着ているスエットにはポケットがない。

だが、わずか数カ所探したところで玄関のドアの開く音が聞こえ、ビクッと体を起こした。

どうしたらいいの？

二人の服役囚がまだ逃走中、とアナウンサーは言っていた。

だが、きわめて危険だと思われるのは、そのうちのひとりだけ。
彼がその危険な服役囚かどうかは、二つに一つだ。

でも、テッドは彼女の拳銃を奪い、猟銃の弾を抜いた。なんの断りもなく。けちな犯罪で投獄されるには、テッドは用心深く、知的すぎる。

逃げるチャンスを与えられたら、また捕まるようなヘマを犯すタイプではない。概して、並みの犯罪者は並み外れて愚かだが、テッドは並みでもなければ愚かでもなかった。

ヒカルの観察どおりだとしたら、きわめて危険な逃亡中の犯罪者と雪に閉じ込められた可能性は格段に高くなる。

極めて危険と言ったら、殺人犯の意味ではないのか。銀行強盗とか。

いくらなんでも、パンを盗んだ者には、そんな説明はつけないものだ。

「ヒカル？」

彼の声がした。

できるだけ物音をたてないように、急いで猟銃をラックに戻した。

「こつちよ！」大声で答えた。「下着をしまってるの！」

ドレッサーの引き出しを開け開めして、それらしい音をたて、顔に笑顔を張りつけて部屋を出た。

「外は凍えそうでしょう?」

「めちやくちや寒いよ」

テッドが肩をゆすつてコートを脱ぎ、元の場所に掛けた。ティムは体を揺すつて雪を床に落とすと、十五分も離ればなれになっていた彼女に、再会の挨拶をするため軽い足取りで駆けてきた。

床を濡らして悪い子ね、と小言が口をついて出た。内心が表情に表れないのを願いながら、長い柄のついた簞とモップを取りにいった。

顔が緊張で強張っているのがわかる。無理して笑顔を浮かべても、歪んだ顔にしか見えないはずだ。
どうしたらいいのだろう。

打つ手はある?

だが、とりあえずは、危険はなさそうに思えた。

ヒカルがニュースを聴いたのを知らなければ、テッドには脅威に感じる理由がない。それに、殺す理由もなかった。

彼にとっては、ヒカルは食べ物と避難所とセックスの供給源なのだから。

だが、顔から血の気が引いた。また彼に体を触れられるなんて、耐えられない。そんなの無理だ。

台所から物音がした。冷えた体を温めるため、彼がカップにコーヒーをついでいる。

ヒカルの手は震えだした。ああ、神さま。

苦しすぎて、胸が張り裂けてしまいそうだ。

これほど男に惹かれたことはなかった。ハリソンにも、こんな思いを抱いてはいなかった。

自分の体で温め、命を救った相手だけに、原始的かつ根本の部分でテッドが自分のものになっていた。

わずか十二時間のうちに、理性と感情の中心に彼が据えられていた。

自分を守りたくて、まだ愛とは呼んでいないけれど　だがもう遅過ぎる。

自分の一部が引き千切られたようで、乗り越えられそうにない痛みがある。

それに、どうしたらいいの？

彼の子供を宿したかもしれない。

彼はヒカルと共に笑い、ふざけ、彼女の体を愛^{いづく}しんだ。

一貫して優しく、思いやりがあつた。

今だってそうだ。

そのすべてが、愛の行為としか呼びよのないものだった。

それとも、連続殺人鬼が強姦して殺した女たち以外に対して、優しく振舞うこともあるのだろうか。

だが、ヒカルは人を見る目の確かさに自信を持っていた。それは十六歳のときから日本を出て、一人で海外生活をしているうちに培われたものだった。

今まで見たかぎりのテッドは、人に好かれるきちんとした男性で、子供たちにラグビーのコーチ役を買って出るようなタイプに見えた。

それに、上機嫌で自分のことを話し、ヒカルをデートにまで誘った。まるでヒカルの人生の一部となり、長く付き合うつもりがあるみたいだった。

ふざけたお遊びのつもりでなければ、妄想に取り憑かれているのだろうか。

だが、ヒカルは彼が垣間見せた、それまでとはまったく違う、陰しく恐ろしいような表情を憶えていた。それはヒカルの拳銃のありかを尋ねたときのことだ。

妄想に取り愚かれているとは、とても思えない。彼は危険な男なのだ。彼を警察に突き出さなければならぬ。

それはわかっているし、その覚悟もあるが、なぜか心がズキリとして呻き声を洩らしそうになった。

これまでは罪を犯した夫や恋人を匿^{かくま}う女たちに疑問を感じてきたけれど、今ならその気持ちがわかる。

テッドが長く投獄されるか、悪くすると死刑になると思っただけで、全身から力が抜けた。

確かラジオのアナウンサーは警官二人が死んだとは言ったが、全員が死亡したとは言わなかった。警官の一人が行方不明だとも言っていない。

藁^{わら}をも掴むって、今のこんな心境を言うのだろう。
そういえば、手摺りに干した制服は、テッドには小さ過ぎたように思う。

グシヨグシヨに濡れて、カチカチに凍っていたとはいえ、洗って干したときの感触でサイズが分かる。

自分のサイズに合わない制服を着る警官なんて居るだろうか。

そこでハツと、ヒカルは思い出した。

そう言えば、テッドは下着を履いていなかった。彼の趣味？

いやいや、と首を振るヒカル。制服の下に下着を着けない警官なんて居るわけがない。

そう、テッドは逃亡中の服役囚で、警官ではない。移送車の事故を知っているのを、彼に悟られてはならない。

電気が復旧するまで、当面テレビで何かが流れる心配はなかった。電話回線も通じていないので、インターネットでニュースを確認することもない。

そしてラジオのほうは、彼が次にトイレに入ったときに、電池をはずして隠してしまおう。

定期的に電話をチェックして、通話できるようになったら、隙を見て警察に電話すればいい。油断なく立ちまわれば、何事もなく切

り抜けられる。

「ヒカル!？」

その声に、彼女は跳びあがった。驚いて心臓が破裂しそうだった。テッドが戸口から、鋭い目付きでこちらを見ていた。箒とモップを手探りし、危うく取り落としそうになった。

「驚かさないで!」

「悪かった」

テッドはゆっくりと進みでて、彼女の手から箒とモップを奪った。ヒカルは胸苦しさで闘いながら、知らず知らずのうちに後退あごすのった。

狭い洗濯室だと、ただでさえ大きい男が、よけいに大きく見える。入口は彼の肩ですっかり塞がれていた。

愛の行為の最中は、その大きさや力強さが嬉しかったのに、いまは抵抗しようのない体格の差に圧倒される。

今後に備えて対抗手段を用意しておかなければならない。その機

会があつたら、逃げるのが一番だろう。

「どうかしたのか？」

尋ねるテッドは穏やかで、なにを考えているか分からない表情をしていたが、目はヒカルの顔に注がれていた。

真正面に立ちほだかっているのです、この場所では避けようがない。

「ひどく怯えた顔をしてるぞ」と、彼は付け加えた。

ヒカルは自分の顔付きを思い浮かべた。ここで否定しても、嘘だと見破られる。

「そうよ」

答える声が震えた。言葉が零れ出すまで、自分がなにを言つつもりか分からなかった。

「だって……わたし……夫が死んで二年よ。その間ずっと……あなたには会ったばかりで、わたしたち……いいえ、わたし……ああ、もう」

しどろもどろになり、最後には言葉を失った。テッドは表情をやわらげ、目元に淡い笑みを浮かべた。

「つまりきみは『現実にはケツをかじられた』って訳か？ あたりを見回してみたら、すべてがいつぱんに襲いかかって来て、きみは思った。『ああ、わたしは何をしているの？』って」

どうにか頷いた。

「そんなところよ」

唾を呑みこむ。

「よし、一緒に考えてみよう。きみが一人で吹雪に閉じこめられていると、死にかけた見ず知らずの他人が庭先に倒れていた。それで、きみはそいつの命を救ってやった。

きみは二年間恋人なしにやってきたのに、どういうわけだか、その夜の間に、そいつがきみに乗っかっていた。まごついて当然だよな。

まったく避妊せずに、妊娠する可能性があったら、なおさらだ」

ヒカルは顔が蒼白になった気がした。

「おやおや」

と、テッドが掃除道具を脇に置き、そっと彼女の腕を掴む。大きい

な手で腕をなでられ、抱き寄せられた。

「いったい、どうしたっていうんだ？ カレンダーを調べてみたら、思ったより妊娠の可能性が高かったのか？」

どうしたらいいの？

彼に触れられたショックで気絶しそうだった。恐くて耐えられそうにない。

でも、彼が罪人で、逃亡中の服役囚だとしたら、どうしてこんなに優しく慰められるの？

自分を抱き締めている逞しい肉体が、これほど正しいと感ずるのはなぜなのか。

彼の胸に頭を乗せて、外の世界のことはすべて忘れ、だれにも邪魔されることのない隔離された郊外で、二人ひっそりと暮らしたら……。

「ヒカル？」

テッドが顔を傾けて、顔をのぞきこんでいた。酸素が足りない気がして、ヒカルは勢いよく息を吸った。

「まずい時期なの、今が」と、ポロツともらした。

彼も息を呑んだ。

やっぱり、お尻を現実にかじられたように見えた。

「ぴったりののか？」

「賭けてもいいわ」

よかった、少し声が落ち着いてきた。パニックの峠は過ぎたようだ、ヒカルは思った。

とりあえず危険はないと判断したのだから、冷静な態度を保つべきだった。

彼が近づいて来るたびに、嬉々として愛しあつたはずの女が跳びあがっていたら、疑ってくれと言っているようなものだ。

今回は彼の洞察力のおかげで、もっともらしい言い訳ができて運がよかったが、彼の鋭さは肝に銘じておかなければならない。

ヒカルがラジオを聴いたのを知ったら、五秒もかけずにすべてを関連づけて、こちらの企みに気づくだろう。

「そうなのか。それで、きみはどうしたい？」

その時、信じられないことに、彼が慄おのいていることに気づいた。
声まで震えている。テッドは言った。

「そのへんには恐ろしく慎重だったし、相手にもそれを望んでたんだが」

「現実にはじわじわとかじられてる気分？」

「ああ、そんな気分だね。ケツに噛み跡がついてるよ。なにより困っちゃうのはさ……ヒカル。俺がその可能性を喜んでるってことだ」

なんて人なの……。

ヒカルは無我夢中で彼にしがみ付いた。

この人は人殺しなんかじゃない！

こんなに自分を気遣ってくれて、父親になるという予感に震えている人が、そんなわけがない。そう思いたい。

ヒカルの知るテッドという男が、彼女が恐れている逃亡犯だとしたら、それこそ二重人格者だろう。緊張でカラカラになった口を、唾で湿らした。

「でも、わたしたち、慎重にならないと」

どうにか口にした。逃げ道を与えられて助かった。

たとえテッドが危険ではないほうの逃亡者だとしても、彼と寝続けるのは犯罪と同じ、あまりに無責任な行為だった。

それでも、すでに無責任なことを仕出かしている。これまでのことは許せても、これ以上重ねたらお天道様の下で生きてはいけない。

「わかった」彼は渋々とヒカルを解放した。「昼めしの準備ができたら、呼んでくれ。もう少し雪をかいてくる」

ヒカルは立ち尽くしたまま、彼がドアを閉める音を聞いた。手で顔をおおい、がっくりと洗濯機にもたれた。お願いだから、早く電話を通じるようにして！

こんな状態には数日どころか、もう一時間も耐えられない！
出来ることなら、すすり泣きたかった。喚き散らしたかった。

このような困った立場に巻き込まれるきっかけを作った自分を、いや、この家にやって来た彼を、掴んで壁に叩きつけ、このような

状況を作った彼の愚かさをなじってやりたかった。

なにより、すべてが嘘であってくれたらと願わずにいられない。
自分の出した結論が、どれもまったくの見当違いであってくれた
なら……。

5・もう一人の来訪者

シチューをガスコンロで温めているあいだに、ヒカルはラジオの電池を抜きとり、蓋つきの小鍋に隠した。

それから電話をチェックしたが、まだ発信音はなかった。

風が止んでまだ二、三時間なのだから、まだこの地域まで作業が進んでいるわけがない。移送車が事故に遭ったのが分かっているということは、吹雪が酷くなる前に起きたのだろう。

警察関係者には、現場に駆け付けて、三人の警官の死亡を確認する時間があったのだから。折りよく吹雪にならなければ、テッドも逃げおおせなかったはずだ。

ラジオでは、『吹雪の最中に事故が起きた』と報じていたが、報道が常に正確だとは限らない。

ヒカルはシチューの様子を見て、更に二分は温めることにした。ポーチの木の板にシャベルが当たる音がする。

テッドがいま作業しているのは、窓から見えない場所だった。中でシャベルの音が聞こえるなら、外にいた彼にもラジオの音が聞こえたのだろうか？

額に汗が噴きだした。ヒカルは椅子にへたり込んだ。彼は聞こえなかったフリをしているの？

ああ、こんなことを続けていたら、発狂してしまう。

それを避けるには、疑心暗鬼になることを止めるしかなかった。

テッドが殺人犯だろうと、並みの犯罪者だろうと、警察に突きださなければならぬことは決まっている。

今はただ、彼がなにを知り、なにを考えているか思い悩むのはやめて、最善を尽くすしかなかった。

再び、猟銃のことが頭に浮かんた。急いで椅子から立ち上がり、弾薬をより徹底して探すために寝室に向かった。

一人になれる貴重な時間を、無駄にしている余裕はない。

タンスの引き出しに弾薬の箱はなかった。直感が働くのを願って、室内を見まわした。隠し場所として一番ありそうな場所　あるいは、なさそうな場所は？

だがどう見てもただの寝室で、それらしい秘密の壁板も、隠し戸棚もある筈がない。ベッドに近付き、枕の下とマットレスを探ってみたが、どちらもハズレだった。

これ以上長居をすると、危険を招きかねない。慌てて台所に戻り、テーブルの準備を始めた。

ちょうどセットし終えたとき、テッドがブーツから雪を落とす音がして、ドアが開いた。

「まったく、なんて寒さだ！」

彼はコートを脱ぎながら身震いし、椅子に座って重たいブーツを脱いだ。外気で顔が赤らんでいる。

この寒さにも関わらず汗をかき、額をおおった霜が暖かい室内に入るなり溶けだして、水滴となってこめかみを伝っていた。

彼は袖で水気を拭くと、暖炉に薪を足して炎に手をかざした。血を通わせようと素早く手を擦り合わせている。

「よかったら、コーヒーをもう一度淹れるけど」

ヒカルはシチューの大鉢をテーブルに置きがてら声をかけた。「それとも、水か、ミルクにする？」

「水がいい」

と、前に使ったのと同じ椅子に腰掛けた。

今回は外に出してもらえなかったティムが、暖炉前の特等席を離

れて、テッドの椅子の脇に立った。期待に目を輝かせて、彼の大腿に鼻面をつける。

折りしもテッドは、大鉢からたつぷりのシチューを取り分けようとしていたが、その途中で手を止めた。自分を見つめる熱っぽい茶色の瞳を見おろし、ヒカルに横目をやる。

「犬の分を、俺が横取りしたのかい？」

「いいえ、あなたに罪悪感を植えつけようとしてるだけよ」

「もう、植えつけられちゃった」

「彼はその道の権威だから。ティム、こっちへいらっしゃい」

ヒカルが膝を叩いても、テッドのほうに御し易いとみたのか、ティムは彼女の誘いを無視した。

テッドはスプーンでシチューを口元まで運んだものの、食べられずにいた。見下ろせば、ティムが自分を見上げている。スプーンを皿に戻した。

「頼むから、なんとかしてくれ」
と、ヒカルに泣きついた。

「ティム、いらっしやい」

彼女はもう一度言い、強情な犬に手を伸ばした。
その時だった。

ティムがふいにテッドから顔をそむけるや、耳を立てて台所のドアを見た。吠えはしないまでも、警戒して全身の筋肉を震わせている。

すべてがあつという間の出来事だった。

テッド・パーカーは椅子から飛び出すなり、ヒカルを椅子から引き上げて背後に回し、同時にベルトの後ろから拳銃を抜き取った。

一瞬クラッとしたヒカルをよそに、彼のほうはティムと同じくらい熱心に耳をそばだてている。

次の瞬間、彼女の肩を押して食器棚の脇に座らせ、そこから動くなど手ぶりで伝えた。彼は音の立たない靴下だけの足でダイニングの窓まで行き、壁に背中をつけた。

ゆっくりと窓に頭を近づけ、片目でどうにか見られるところまで動かすと、すぐさま頭を引っ込めた。そしてまた、もう一度同じように外を窺った。

ティムの喉からは低い咆哮が漏れ出した。

テッドがまた手ぶりしてよこしたので、ヒカルは咄嗟にティムを引き寄せ、その体を抱きしめた。

でも、黙らせるにはどうしたらいいの？

鼻面を掴むとか？

しかし、相手は力のある犬なので、その気になれば手ぐらい振り払われてしまう。

今、ヒカルの頭には疑問が渦巻いた。

外に居るのが警官だったら、どうしたらいいの？

吹雪の最中はテッドを追えなかったにしろ、今は潜伏して居そうな場所を手あたり次第に探し始めたのかもしれない。

でも、警官だったら徒歩ではなく、スノーモービルを使いそうなものだ。

特徴のあるモーターの音は聞こえなかったし、そもそも寒さが厳し過ぎて、長く外にいるのは危険だろう。

逃亡中の服役囚はもう一人いる。その一人がそこまで来ているとしたら、テッドは警戒するだろうか？

「裏の小屋を調べてなかった」
テッドが忌々しげに呟いた。「俺としたことが、なんで調べなかったんだ！」

「一昨日、鍵をかけたわ」

ヒカルは声を低めたまま言った。

「鍵は役に立たない」

彼は小首を傾げて耳を澄ませ、黙るようにとまた手ぶりした。
ティムはヒカルの腕のなかで震えていた。彼女もだ。

頭は大混乱だった。昨夜から小屋に誰かが居たとしたら、その人物は警官ではありえない。警官なら直接この家まで来るはずだからだ。

すると、もう一人の逃亡者。

何故かそうでありますようにと、ヒカルは祈る自分に気付いた。

小声でなだめながら、引き寄せた犬の鼻面を抱えた。ティムはすかさず抗い、自由になろうと身を振った。

テッドは、『掴まえてろ』と声を出さずに伝え、台所のドアにじり寄った。

ヒカルがしゃがみ込んでいる食器棚の脇からはドアが見えず、ティムを押さえるので両手は塞がっている。

そのとき、ドアが開いてノブが壁に激突した。

ヒカルが悲鳴をあげて跳び上がるや、自由になったティムがダツと駆け出した。木の床を滑るように突進し、ヒカルの位置からは見えない侵入者へ向かって行く。

ダーン！

銃声が鳴り響いた。

ヒカルは咄嗟に床に伏せた。

まだ何が起きているのか分からない。耳鳴りがして、火薬の刺激臭が鼻を刺す。台所に重い音がしたかと思うと、ガラスの割れる音がそれに続いた。

激しい音の余韻が消えたあと、二人が格闘する猛々しい音が聞こえてきた。呻き声に罵声が混じる。

そこにティムの唸り声が加わり、取っ組みあう人影に飛びかかる毛皮が一瞬視界を横切った。

ヒカルは急いで立ち上がり、猟銃を取りに走った。

テッドは弾が入っていないのを知っているにしろ、もう一人はそれを知らない。

重たい武器を両手で持ち、台所に取って返した。

食器棚を回ったところで、横から現れた誰かに肩のあたりを鷲掴みにされ、突き飛ばされた。

凄い力だったが、ヒカルにちょっとした疑問が湧いた。

倒れた拍子にカウンターの尖った角で肩を打ちつけ、背中から床に落ちて、痺れた腕から猟銃を取り落とした。激しい痛みにも声をあげた。

再び猟銃をつかんだヒカルは片膝をついた。

顔が良く見えないが、二人は食器棚に乗りかかるようにして、死闘を繰り広げていた。

両者とも片手に拳銃を持ち、もう一方の手で相手の手首をつかんで、優位に立とうとしている。

すると二人の体が横ざまに倒れた。

コップ類が転がり、床に落ちる。小麦粉が雲のように飛散して、粉末の布となっておりとあらゆるものの表面を覆った。

床に踏ん張ろうとしたテッドの足が滑った。彼の力が緩んだ。すかさず体をひねった闖入者に肘打ちを喰らい、そのはずみで手が放れた。

いまや、拳銃を持つ闖入者の手は自由だった。その左頬には目の下から耳にかけて深い傷跡が見て取れた。

ヒカルは自分が動き出そうとしていることは意識していた。

闖入者の手に噛み付こうと思いつつ、恐ろしさに半分竦みそうになっている。すべて目に見えるものがスローモーションに切り替わっていた。

このままでは、自分が飛び掛かるより先に、奴が銃口を下げて引き金を引いてしまう。

そう思ったときだった。ティムが走った。

低く体を構え、闖入者の脚に噛みついた。相手は痛さとショックで罵声を上げ、もう片方の足を振り出した。

頭を蹴られたティムがキャンと鳴いて脇によけた。だが、その横でテッドは体勢を立て直していた。

相手に飛び掛かり、勢いづいて二人ともにテーブルに倒れ込んだ。テーブルはひっくり返り、椅子は壊れて、肉の塊とジャガイモと二エンジンが床に散らばった。

床に転がった二人。上にいるのはテッドのほうだった。闖入者の頭を床に叩きつけ、一瞬気を失ったと見るや、肘でみぞおちに一撃を加えた。

仕上げに、息を切らして痙攣する闖入者の顔に、鋭いパンチを繰り出した。その衝撃がまだ残っているうちに、相手の首筋に銃口を突きつけた。相手はピクリとも動かなくなった。

「銃を捨てろ！」

荒い息をつきながら命じるテッドの声。「今すぐ捨てないと、引き金を引くぞ」と首筋を圧迫した。

闖入者の手から銃が落ちた。テッドはその銃を左手で自分のほうに滑らせ、左脚の下に敷いた。

それから自分の拳銃をベルトの後ろに戻し、相手を両手で掴んで持ち上げるや、腹から床に叩きつけた。

だが、闖入者はまだ両手に力を入れている。それに気付いたヒカルは前に出て、奴の顔に猟銃の銃口を突きつけた。

「動かないで！」

相手はゆつくりと力を抜いた。

テッドはチラッと猟銃を見たきり、なにも言わなかった。弾を抜きとってあることは、口を噤んでいるつもりらしい。

だが、ヒカルのほうが知らぬふりを決め込んだ。テッドには知らないと思わせておこう。

テッドは闖入者の両腕を背中にまわし、それを片手で掴んだ。

「少しでも動いてみる」

ざらついた低い声。「その腐った頭を吹き飛ばしてやる」

テッドは顔を相手に向けたままヒカルに命じた。

「細いロープはあるか？　なければスカーフでもいい」

「スカーフなら何枚もあるわ」

「取ってきてくれ」

二階に上がり、ドレスサーをかき回してスカーフを三枚見つけた。膝は笑い、心臓は激しく肋骨に打ちつけている。軽い吐き気まであった。

手摺りに寄りかかるようにして、震える体を階下に運んだ。
二人はまったく動いていないようだ。

腹這いになった闖入者にテッドがまたがり、その周囲に壊れた家具とシチュアの残骸が散乱している。

ティムは闖入者の頭側に立ち、顔に鼻を近づけて唸っていた。
テッドはスカーフを一枚受け取ると、縦長に捻って相手の手首に巻きつけた。

生地をきつく引っぱって、固い結び目をつくる。それが済むと拳銃をベルトに戻し、膝に敷いていた相手の拳銃を持って立ちあがった。

屈んで闖入者の制服の襟　乱闘が終わった今気付いたのだが、
闖入者も警官の制服を着ていた　を掴んで引きずり上げた。

そして、唯一上を向いている椅子に有無を言わせず座らせておいて、自分はその場にしゃがみ込んだ。

そのときヒカルは気付いた。闖入者は男ではなかった。短髪で頬に傷があるが、胸が大きい。女だったのだ。

先ほど、背後から突き飛ばされたときに感じた疑問は、これだった。女の匂いだった。

テッドは再び拳銃を取り出して、銃口を首筋に押しつけた。

「そうだ。女だ、こいつは。だが手強い」

そう言いながら、片足に一枚ずつスカーフを使い、女の足を椅子の脚に縛り付けていく。頬傷の女の頭がうしろに垂れた。

息は苦しげで、片方の目は腫れあがり、両方の口角からは血が滴っていた。彼女は今、青ざめて苦しげな顔で、ぼんやりと立ち尽くすヒカルを見上げた。

ヒカルの手には、持っていることを忘れてしまったかのように、まだ猟銃が握られていた。

「こいつを撃つて！」

頬傷の女は血の混じった声を発した。

「お願い……こいつを撃つて。こいつが逃亡中の殺人犯よ。私が警官だよ。こいつは死んだ警官の制服を奪いやがった……さあ、ひと思いにこいつを撃つんだ！ 肩でも、脚でもいい」

「考えたな」

テッドはそう言って立ち上がった。

「奥さん」と頬傷の女。「わたしが言ってることは本当だよ。お願い、信じて！」

テッドは流れるような動作で、感覚のなくなったヒカルの手から猟銃を奪い、ヒカルはすんなり手放した。

「チツ」と、頬傷の女は舌打ちした。

なす術なしといった様子で、腫れていないほうの目を閉じ、椅子の背にもたれた。まだゼエゼエ言っている。

6・凶悪犯

ヒカルは今、襲いかかってきた眩暈のほうと闘っていた。

テッドも無傷ではなかった。右の頬骨には瘤が出来つつあり、左の眉毛には血が固まっている。唇は切れて血が滲んでいた。彼は目の血のほうを拭って、ヒカルを見た。

「大丈夫か？」

「ええ」

と、答えてはみたものの、カウンターの角にぶつけた肩がズキズキして、いつ気絶するか自分でもわからなかった。

「そつは見えないぞ。座って……」

彼はざっとまわりを見て、壊れていない椅子を立てると、ヒカルの肩に手を置いて押すようにして座らせた。

「アドレナリンだ」

テッドは端的に言った。「恐慌状態を脱すると、力が抜けたように感じる」

それから頬傷の女に向きなおって言った。

「裏の小屋に押し入ったんだろう？ 向ここの暖炉に火を入れて、暖かく快適に過ごした。吹雪が荒れ狂ってる間は、煙突から昇る煙も見えないからだ。」

ところが天気が良くなったんで、火を消さなきゃなくなかった。酷い寒さだったろうな。だが防寒具と食料がなけりゃ、山に逃げ込むわけにもいかない。それで、こっちに押し入るしかないことに気付いたわけだ」

「結構な筋書きだね」

と、頬傷の女は応じた。「おまえが後からやって来たら、そうするつもりだったのかい？」

目を開けて女は周囲を見回した。「奥さん、おひとり？ ほかの家族は、やっぱりおまえが殺しちまったのか？」

「黙れ！ 口からでまかせを」

ヒカルはテッドの視線を感じた。頬傷の女の話に、どう反応するか気にしているのだろう。

それでも、ヒカルは眉ひとつ動かさず、囚われの女を見つづけた。

平静さを保つのは、難しくなかった。感覚が麻痺して茫然としていたからだ。

テッドがヒカルの椅子の前にしゃがみこんだ。彼女の頬に触れてから、両手をくるんだ。

ヒカルは瞬きして、彼の目に焦点を合わせた。

眉は軽くひそめられ、青い瞳で探るようにこちらを見ている。

「やつの心理ゲームに惑わされるなよ。肩の力を抜いて。俺を信用してくれ」

「その男の話を聞いちゃだめだよ、奥さん」と、頬傷の女が言った。

その声を無視して、テッドは続けた。

「気分が良くないんだろ？　しばらく、横になってたほうがいいかもしれない。さあ、おいで。手を貸すから、長椅子へ移動しよう」

ヒカルの肘に手を添えて立たせた。だが、彼女が向きを変えて歩き出そうとした途端、テッドは腹立たしげに悪態をついて引きとめた。

「どうしたの？」

彼の豹変ぶりに戸惑って、ヒカルは尋ねた。

「きみは怪我をしてないと言った」

「ええ、してないわ」

「背中から出血してる」

テッドは険しい顔でヒカルを一階の寝室に引きたてる。立ち止まって猟銃をラックに戻してから、彼女をバスルームに押しやった。光がよく入るようにカーテンを開け、彼女のシャツのボタンをはずしだした。

「その傷、さっき倒れたときにカウンターの角でぶつけたの」

ヒカルが手を出そうとすると、テッドはその手を払ってシャツを脱がせ、自分のほうに背中を向けさせた。

ヒカルは震えた。テッドが洗面用のタオルを濡らせて背中に押しあてる。肩甲骨のすぐ下あたりだ。ヒカルは痛みにあたじろいだ。

「背中に特大の青アザが出来つつある」

テッドはそっと傷口を洗っている。「アイスパックをしなきゃな

らないが、まずは傷口を消毒してその上にガーゼをあてる。救急用品はどこにある？」

「食器棚の上」

「ベッドに横になってろ。すぐに戻る」

ヒカルはうつ伏せになった。だが、シャツを着ていないので寒い。体のまわりに上掛けを引き寄せた。

台所のほうからテッドと女の声が聞こえる。二声三声聞こえたあと、女の大きな声がした。

「奥さん、大丈夫！？ この男に変なことされてない！？」

すると直後に椅子が倒れる音がした。

テッドが救急箱を持って、ヒカルがいる部屋へ戻って来た。膝に救急箱を抱えて、ヒカルの脇に腰を下ろした。

抗生物質の軟膏を傷口に塗る手つきは優しかったが、軽く触れただけで痛みが走る。ヒカルは耐えると決めて、もうじきたばた動かなかった。

「あの女の人に何かしたの？」

テッドは答えなかった。傷口にガーゼをのせ、Ｔシャツでヒカルの体を覆った。

「静かに横になってろ。今度はアイスパックを取ってくる」

テッドお手製の即席アイスパックは、ジップロックのビニール袋にクーラーボックスの氷を詰めたものだった。そつと背中に置かれた瞬間、ヒカルは跳びあがった。

「凍えちゃう！」

「そうか、Ｔシャツが薄過ぎるのかな。いまタオルを持ってくる」

彼はバスルームからタオルを取ってきて、Ｔシャツの代わりに掛けた。これで、どうにか耐えられる程度の冷たさになった。それでも部屋は冷えきっている。テッドはさらに上掛けをかけてくれた。

「まだ寒いかな？」

彼女の髪を撫でながら尋ねた。「なんなら、二階に運んでやるぞ」

「いいえ、上掛けがあれば大丈夫。でも、なんだか眠いわ」

「ショックの反動だ」

腰を屈めて、こめかみに軽くキスした。「少し休んだらいい。次に目を覚ましたときは気分がよくなってるよ」

「今は自分がすごく弱虫になった気分」

「殴り合いは初めてか？」

「ええ、そうよ。気持ちのいいもんじゃなかったわ。わたし、お嬢ちゃんみたいだったでしょ？」

テッドは喉を転がすように笑った。指でそつと髪を撫でている。

「お嬢ちゃんってのは、どう振る舞うものなんだ？」

「ほら、映画に出てくるじゃない。きゃあきゃあ悲鳴をあげながら、人の邪魔をするのよ」

「きみも悲鳴をあげた？」

「あげたわよ、あいつがドアを蹴破ったとき。天地がひっくり返ったかと思っただわ」

「なるほどね。それで、きみは邪魔をしたかい？」

「しないように努力したわ」

「邪魔なんかしてないよ、可愛いね、きみは」

ちから付けるような口調だ。「きみは冷静さを失わず、猟銃を取ってきて、奴に突きつけた」

もう一度、唇を寄せてくる。冷えた皮膚に彼の唇が温かい。

「どんな戦いでも、俺ならきみを味方に選ぶさ。さあ、眠ったほうがいい。台所の掃除は心配するな。ティムと俺でやっつくから」

彼が望んでいるとおりにヒカルが笑顔を返すと、テッドはベッドから立ちあがった。ヒカルが目を閉じて数秒後、静かにドアが閉まる音が聞こえた。

目を開いた。

アイスパックが肩の痛みを和らげてくれているので、静かに横たわっていた。十五分冷やしたら、十五分休む。記憶が確かなら、それが氷を使った効果的な治療法だ。

テッドは最低でも一時間は様子を見に来ないと踏んだ。そして今、自分を労わ^{いた}ってられる時間は僅かしかない。

彼が台所を動きまわる音が聞こえてくる。割れたガラスを掃く、澄んだ音。木がバリバリ鳴っているから、砕けた椅子の残骸を処分しているのだろう。

小麦粉が舞ってもたらした被害は甚大だった。綺麗にするにはまず掃除機をかけなければならないが、まだ電気は通じていない。モップで小麦粉をすべて洗い流すには大変な時間がかかる。

囚われの頬傷の女の声らしきものは聞こえなかった。

ヒカルは上掛けを剥ぎ、ゆっくりとベッドを出た。静かにクローゼットの扉を開け、ハリソンのスエットシャツを取り出すと、恐る恐る頭から被った。

傷んだ肩と背中の中の筋肉が抵抗し、その痛みにたじろいだ。そして、弾薬の搜索を開始した。

三十分後、探している箱が見つかった。ハリソンのジャケットのポケットの中にあった。

ヒカルは、ハリソンのネクタイを五、六本首にぶらさげて寝室を出た。手には猟銃を握っている。

頬傷の女は最後にヒカルが見たときとは違う姿勢だった。椅子ごと仰向けに倒れていた。

ヒカルの足音を聞きつけて見えるほうの目を開き、猟銃に気付くと目を丸くした。

そして、うつすらと満足げな笑みを浮かべ、ヒカルに頷きかけた。

テッドは台所で数枚の布巾を洗っている。片付けはあらかた終わっていたが、哀れなほど家具の数が減り、ところどころにまだ小麦粉が残っていた。

テッドが布巾を絞りながら言った。

「こいつは只者じゃないって言ったろ？ 相当な筋力を鍛え上げて来た女だ。ただの女と思っていたら危険だ。それに減らず口も相変わらずだしな。こうしておけば、少しは……」

その後なにを言うつもりだったにしろ、猟銃を構えたヒカルを見たとき、テッドの唇は凍りついた。

「右手はわたしから見える位置に出しておくのよ」

と、ヒカルは静かに告げた。「左手で腰の後ろから拳銃を取り出したら、テーブルに置いて、こちらに滑らせて」

テッドは動かない。青い瞳に陰しく、冷たい表情が浮かんだ。

「どうするつもりだ？」

「わたしの言うとおりにして」

テッドはちらりとも猟銃を見なかった。口を一文字に引き絞り、彼女のほうに歩きだした。

「弾薬なら見付けたわよ！」

と、彼が猟銃に手の届く距離まで来る前に、急いで言った。「ジャケットのポケットにあったわ」

これでハッターではないことが彼にも分かる。テッドは立ち止まり、怒りに顔を歪めた。猟銃を持っていなければ、その形相の恐ろしさにすくみ上がっていたところだ。

「拳銃を出して」と催促した。

彼は右手をテーブルに置いたまま、ゆっくりと左手を背中にあわせ、抜き出した拳銃をテーブルに乗せて、彼女のほうに滑らせた。

「あたしのも忘れるなよ」

ヒカルの背後から、頬傷の女の声が飛んだ。少し呂律がまわっていない。殴られた口と顎が腫れ、黒ずんできていた。

「もう一挺いっぴんもよ」

テッドの剣幕に怯むことなく、ヒカルは命令した。

彼は黙って従った。

「次は一步下がって」

テッドは言われたとおり下がった。

ヒカルは自分の拳銃を手に取り、猟銃を置いた。ヒカルにとって、拳銃のほうが手軽に扱える。

「そう、それでいいわ。椅子に座って、手を後ろにまわして」

「いい加減にしろ、ヒカル」

テッドが噛みしめた歯の間から、声押し出した。「そいつは殺人犯だ。そいつの言うことに耳を貸すんじゃない。だいたい、なんでそんな奴の話を信じるんだ？」

「座って！」

ヒカルはもう一度命じた。

「どうしてだ！ どうして俺の言葉に耳を傾けようとしらない！」

テッドは怒りに駆られていた。

ヒカルは言った。

「移送車の事故のニュースをラジオで聴いたの。三人の警官が殺され、二人の服役囚が逃げた」

そう告げる間、テッドの顔から目を離さなかった。彼の瞳孔が広がり、顎がこわばる。

「それと、制服があなたの体格とは違っていたわ。財布も持っていないし、制服のズボンは破れて血がついていたのに、あなたの体のその箇所には傷一つ負っていない」

「じゃあ、支給品の拳銃はどう説明する？ 俺が制服を盗んだんなら、なぜ銃も一緒に盗まなかった？」

「分からないわ」

ヒカルは認めた。「事故のとき、あなたは意識を失って、次に気付いたときには、ほかの服役囚が先に銃器を盗って逃げていたのかもね。細かいことまで、全部分かってるわけじゃないの。」

ただ、辻褄の合わない部分が沢山あって、あなたの答えは説明になっていない。どうして猟銃を空にして弾薬を隠したの？」

テッドは臆さず答えた。

「安全のためだ」

彼女も同様に応じた。

「ほらね。さあ、腰掛けて」

彼は座った。状況が気に入らないようだが、ヒカルの指は引き金にかかり、その瞳には迷いがなかった。

「手を後ろに！」

テッドは手を後ろにまわした。怒りで顔が赤くなっている。

彼が急に向きを変えて拳銃を叩き落とす場合を考慮して、ヒカルは彼の手が届かない背後にまわった。

首に提げたネクタイを一本取って、ゆるい輪を二つこしらえた。それから素早く彼に近付き、輪を手にかけて端をきゅっと引いた。

テッドは動こうとして体重を移動したが、手首が締めあげられるなり観念したように言った。

「手際がいいんだな。どうやったんだ？」

「あら、日本人は総じて手先が器用なのよ。投げ縄みたいに輪を作っておいたの。あとは引っぱるだけ。頭いいでしょ？」

余った両端を手首の間に巻きつけて輪をきつくし、適当な位置で結び目をつくる。

「これでよし、と。次は足よ」

テッドはおとなしかった。椅子の脚に足を縛られた。

「聞いてくれ」

それでも、彼は言わずにいらなかった。「俺はこの辺りに来たばかりで間がないから、まだ俺のことを知らない人も多い。信じてくれ、怪しい者じゃない」

「そうだろうさ」

頬傷の女が怒声を浴びせかけた。「警官三人を殺したおまえのとだから、ここを出る前に彼女も殺すつもりだったんだろ？」

さあ、奥さん、あたしを解ほどいておくれ。手の感覚がなくなってきた」

「やめろ、ヒカル！ そいつが囚人だ。俺の話を聞けって！」

ヒカルは居間を歩き、暖炉に薪を足した。それから電話の前で立ち止まり、受話器を持ちあげてダイヤル・トーンを確かめた。まだ、なにも聞こえない。

「なにをしてるの？」

頬傷の女がなじった。「とりあえず椅子を起こしてよ。あたしの大事なところが風邪ひくよ」

「いやよ」ヒカルは答えた。

「なんだって？」

女は耳を疑う、といった調子だった。

「いやだって言ってるの。電話が復旧したら警察に電話をかけ、状況がはっきりするまでは、二人とも今のままでいてもらうのが一番だと思う」

一瞬、呆気にとられたような沈黙が広がった。

すると、テッドが天を仰いでゲラゲラと笑い出した。

頬傷の女はあんぐりと口を開けてヒカルを見上げていたが、急に表情が変わり、顔を火の玉のようにして怒鳴った。

「この！ 腐れ売女^{ばいた}！」

「あらっ、酷い言われようね」

「はははは、さすがは俺が惚れた女！」

テッドの笑い止まない。「愛してるよ！ ハニー。これで今回の件も許す。お陰でこれから先何年も、優しい目をした可愛い女に先手を打たれたって、まわりから冷やかされるだろうけどな！」

ヒカルは笑っている青い瞳に目をやった。笑い過ぎて涙が光っているのを見て、ニツコリせずにいられなかった。

「多分、わたしも愛してる、テッド。でも、まだ解くわけにはいかないわ」

頬傷の女が言った。

「奴はあなたを騙してるんですよ、奥さん。なんでそれが分からない

いの？」

「奥さん？」ヒカルは問いかけた。「さっきとは違う呼びかたみたいだけど？」

「悪かったわ。つい、頭に血が昇ってしまっ」

と、ぎこちなく息を継ぐ。「あなたが、こいつの甘いおべんちゃらに騙されるのを見てたら、むしろくしゃしたもんだから」

「そう？」

「こいつが嘘をついているのが、どうしたら分かってもらえます？」

「今あなたに出来ることはないから、黙っているのが一番かもしれないわ」

ヒカルは愛想よく応じた。

クッククク、とテッドが横を向いたままで笑いを堪えた。

7・空から落ちて来た男

それから三十分後。頬傷の女が口を開いた。

「トイレに行きたいのよ」と、しおらしい声で。

「そこへどうぞ」と、ヒカルは答えた。「あとで拭いておくわ」

ヒカルとしては、あながちジョークでもなかった。この散らかりようでは、どのみち掃除し直さなければならなかった。

もちろんこうした問題が出て来ることは考えが及ばなかったが、両方を縛っておくという計画を変更するつもりはなかった。

申し訳なさそうにテッドを見ると、彼は言った。

「俺なら当面、大丈夫だよ」

その後、ヒカルは三十分ごとに電話をチェックした。

頬傷の女は身をくねらせている。悲惨な状態になりつつあるのだろうか。

辛いのはテッドも同じはずだが、彼はそれを表に出さず、ヒカル

と目が合った際にニタツとした。ただし、殴られて青アザの浮いた顔なので、笑顔というより引きつっているみたいだ。

「通じたわ!」

何度目かのチェックで、ヒカルは勝ち誇ったように叫ぶと電話番号を押した。二人がいつせいにヒカルを見た。

受話器からは歯切れのいい男の声が応対に出た。ヒカルは、
「こんにちは、警察ですね。こちらは、ヒカル・スカイファー」と名乗ってから住所を告げた。

「今、我が家に男と女が来ています。男の方はテッド・パーカー。もう一人の名前は……」

彼女は頬傷の女を振り返った。女は横目で睨み付けるだけで、口はへの字に噤んでいた。

「名前は分かりませんが、左頬に大きな傷があります。どちらも自分が警官で、もうひとりには殺人犯だと主張してます。二人が誰だか、教えていただけますか？」

「クソツタレ!」

受話器から大声が轟いた。

「え？」

「あ、いや、すみません。つい汚い言葉を使っちゃって。今、パーカーがそちらに居るとおっしゃったんですよ？」

「ええ、そうです。彼はお宅の警官なんですか？」

「そうです」

と、電話の向こうの警官は言った。

ほっと胸を撫でおろし、ヒカルはテッドを見た。
さらに受話器から訊ねてきた。

「パーカーともう一人は……」

「二人を椅子に縛り付けて、拳銃を突き付けてます」

「はあ？」

「ですから……」

「スカイファーさん、もう一度お聞きしますが……」

「それより一応確認のため、パーカー警官の風貌を教えてください。目の色は？」

電話の向こうで、警官が面食らっているのがわかる。

「彼の目ですか？ ええつと……だいたいのところをお伝えすると、身長はおよそ六フィート、体重百六十五ポンド、金髪に瞳は茶色です……」

ヒカルはショックのあまり、口がきけなかった。

「……スカイファーさん？」

受話器の向こうの問いかけは耳に入らなかった。
恐ろしくなり、テッド・パーカーを振り返ることも出来ない。

パーカー警官と身長はほぼ同じだが、体重は七十五キロ位でなければならぬ。ここに居るテッドと称する男は、九十キロくらいに見える。

髪は黒に近い茶髪だし、瞳は青だ。

「奥さん！ 奥さん！」

頬傷の女が呼んでいた。ヒカルは振り返った。
テッド・パーカーと称する男を見ると、天井を仰いだまま動かないでいる。

「ごめんなさい！ もう緊急なの！」

と、頬傷の女は言った。「トイレへ行かせて！ お願いよ、奥さん！」

と、必死の表情で懇願した。

ヒカルは受話器を肩と耳の間に挟むと、拳銃を構えたままでヨロヨロと歩み出し、シンクの下の扉から果物ナイフを引き出した。

「駄目だ、ヒカル！」

テッドと称する男が喚いた。「そんなことをしたら危険だ！」

この期に及んで、この男はまだそんなことを言い張っている。

「ハロー？ スカイファーさん……」

「はい」と、電話に弱々しい返事を返す。

途中で電話のコードの長さが足りず引っ張られた。手にしていた拳銃を足元に置き、受話器を耳から離して両手を目一杯伸ばした。

「ヒカル！ 駄目だ！」

ナイフで縄代わりのスカーフを切った。

「ああ……サンキュー、奥さん」

と、頬傷の女は己の両手を揉みしだいた。

長いこと縛られていたせいで痺れているのだろう。手を広げて閉じるを何度も繰り返している。

「足は自分で解くわ」

「スカイフアーさん！？」

と、受話器から大声が飛び出した。

テッドと称する男は、まるで観念したように目を堅く閉じている。

「どうか、されましたか？」

と、電話の向こうの警察官。

「いえ……」

なぜ否定したのか、ヒカル本人にも分からないが訊いた。「もう一人、こちらが警官なのですね？」

勿論、肯定してくるものと思っていた。ところが、

「いいえ、そうは言っていません！ その女の頬に目立つ傷がありますか？」

「ええ」

ヒカルは弱々しく返事を返した。

「そいつは服役囚のビリー・Gです。左頬にはつきりとした傷があるんですよ？ そいつは、ビリー・G・ソントンです。凶悪な奴なんで、今からすぐに警官を数名、そちらに向かわせますので……」

偽警官と凶悪な逃亡犯。

どうということなの？

ここには警官など一人も居なかった。

ヒカルは振り返り、女の所在を目で追った。

頬傷の女、ビリー・G・ソントンは居間との境に立っていた。いつの間にか服を着込んでいる。

慌てて床の拳銃を拾いあげた。立ち上がったとき、ヒカルは手首

を激しく叩かれた。

激痛。その衝撃で、拳銃は台所の端まで飛んだ。

ビリー・Gが猟銃を構え、目の前に立っていた。満足げにニヤついて、受話器を元に戻すようにと無言で指図した。

茫然とするヒカル。ナイフを手にしていることさえ忘れていた。ふらふらと歩き、受話器を元に戻した。

「それでいい。こっちへ来るんだ」と、ビリー・Gは言った。

「彼女に手を出すな！」

と言ったのは、すでに信じられなくなったテッドと称する男だった。

後ろ手に括りつけられた椅子を激しく揺すっている。

ティムの唸り声がした。犬は暖炉の前で、今にも飛び掛からんばかりでいる。

果物ナイフを手にしているものの戦闘経験のないヒカルが、体格があり凶暴な相手に立ち向かえるはずもない。すんなりとナイフも奪われた。

ビリー・Gはその腕をヒカルの首に巻きつけ、窓の外を見ながら言った。

「さて……この降雪じゃ、警察もここまで来るには小一時間はかかるだろう。そのあいだに出来るだけ遠くへ逃げる。まだ陽射しがあるうちに」

すると、椅子に括り付けられた“テッド”が訊いた。

「こんな雪の中、どうやって逃げるつもりだ」

「そうね、車って言いたいところだけど、さすがに無理。裏小屋に立て掛けてあったスキー板を拝借するさ……相棒」と、ニヤつく。

相棒と聞いて、ヒカルは声を出さずにいらなかった。

「やっぱり、そうだったのね。わたしを騙していたのね！」

と、“テッド”に言い募った。「あなたたち二人とも警察から逃げて来たんだわ！　しかも、警官を三人も殺して！」

ヒカルは剣幕を露わにした。

「違う！」と、遮ったのは“テッド”だった。

「どこが違うと言つのよ！？」

ヒカルは怒った。

だが、その問い掛けに応えたのは、なんと背後にいるビリー・Gのほうだった。

「奥さん、そいつはいきなり空から落ちて来たのさ」

と、反応を待つかのように、そこで言葉を切った。「警察の移送車のスリップ事故は、ただの事故じゃない。確かに雪は降っていたけど。あそこは直線道路だ。何かなきゃあ横転などするわけない。そいつが突然、道路の上に現れたのさ。しかも、裸だった。こいつは一見まともそうに見えるが、キ印さ」と、笑い出した。

ひと笑いすると、ビリー・Gは急に真顔になった。そして言い放った。

「グッバイ、相棒」

身動きできない“テッド”に銃口が向けられた。

「やめて！」

身を沈めてビリー・Gの足を踏みつけたヒカルは、腕を振り解いて彼女から離れた。

ビリー・Gは汚い言葉で罵った。そして、
「どっちが先でも、たいした違いはないのよ」と、銃口をヒカルのほうに向けて呟くように言った。

「やめろ！」

椅子に縛られた男が叫んで体を大きく振った。“テッド”は椅子ごと床に倒れた。

だが、躊躇いもせず引き金は引かれた。

カチッ！

訝しげな表情で、再度構えなおすビリー・G。

カチッ！

目を丸くし、見る見る形相が険しく醜く変わる。そして彼女は叫んだ。

「このっ！ 売女があー！」

猟銃を持ち替えた女は、その銃床を振りかざし、ヒカルの頭へ向けて振り下ろした。

「きゃー！」

思わず避けた二の腕に激しい衝撃を受けて、ヒカルは木床の上に倒れた。

ティムが吠え、ビリー・Gを目掛けて跳びかかった。だが、木製の銃床で一突きされ、払いのけられて床に落ちた。

すぐに姿勢を起こして、ティムは再度脚に噛み付こうとしたが、
またも叩かれた。犬は弱々しく唸り声を上げた。

ビリー・Gはなおもヒカルに歩み寄り、
「くたばりな！」
と、猟銃を振りかざす姿勢をとった。

そのとき木椅子が軋んで床に当たる音。
その音を聞いて振り向いたビリー・Gと、“テッド”の眼が合った。

床に倒れている“テッド”の足は半壊した椅子に括り付けられているが、見ると彼の両腕はいつの間にか自由になっていた。

ビリー・Gの視線は今、“テッド”の向こう側 台所の入り口
に転がっている拳銃にあった。

それを察した“テッド”、そしてビリー・Gは同時に拳銃に突進した。ただし、“テッド”のほうは転がりながらだが、辛うじて近い距離にいた彼のほうが早かった。

銃を握り振り向く。

ビリー・Gは体を翻しながら猟銃を投げつけた。

床に当たり跳ね返った猟銃は“テッド”の頭をかすめた。

ビリー・Gは姿勢を低くしながらドアに向かってまっしぐらだ。

ダーン！

「くそ！」

銃弾は外れ、木壁に穴をあけた。

ノブを握ってドアを手前に引きかけているビリー・Gに向けて、床に伏せて両腕を伸ばした“テッド”は、さらに引き金を引いた。

ダーン！

足に括り付けられた椅子を床に叩きつけて壊すと、“テッド”は起き上がりドアに向かった。

太腿を押さえ、崩れるようにして倒れたビリー・Gは苦しげな、そして憎々しげな表情で相手を見上げていた。

ヒカルはようやく冷静を取り戻しつつあった。上体を起こし、左の二の腕を押さえて床に座っていた。“テッド”が戻って来て訊いた。

「大丈夫か？」

「ええ、たぶん」

「随分、思い切ったことをしたな」

弱々しげに笑顔を返すヒカルに、「猟銃だよ。肝を冷やしたよ」

「言ったでしょ……日本人は総じて頭がいいのよ」

男は両手を広げ、肩をすくめた。ヒカルは言った。

「あの時、あいつは椅子に括り付けられていたし、あなたには、『弾薬を見つけた』と言えば、信用するだろうと思ったの。『ジャケツトのポケットにあった』と言ったら、事実なんだから疑わないでしょ？」

もう一度、“テッド”は肩をすくめて見せた。
ティムの唸り声がして、二人してドアの方向を振り返った。

「おい、この犬をどうにかしてよ」

傷ついて床に倒れた女は言った。「今にも咬み付かれそう!」

そう言つと、ビリー・Gは仰向けになつて体を伸ばした。

ヒカルと“テッド”の二人だけの経緯を知らない彼女にとって、
猟銃の薬室内の弾の有無など疑う余地もなかったのだ。

「あら、それも仕方がないことだわ。あなた、ティムを何度も蹴つたじゃないの」

「痛いよ、奥さん。そのネクタイで脚の付け根をきつく縛ってくれない?」

「もうじき警察が来る。おとなしくしている」と、“テッド”が付け足した。

「あの時は取り敢えず、あなたから拳銃が預かれれば良かったの。上手くいったわ」

「ああ、だが危なかったな。それにしても、猟銃には弾を込めていなかったのだから、何故すぐに反撃しなかったんだ?」

ヒカルは首を振った。

「そんな簡単なことではないわ。わたし、ブルブル震えてたんだから……ああなつてしまった以上、あいつには猟銃を持ったまま何事もなく出て行つて欲しかったの。そう願った。

でも、あいつは私たちを殺す気だった。あとは殴り殺されるか、あなたに賭けるか、どちらかしくなつたわ」

「ああ、きみは賭けに勝つたのさ。俺の手を縛つたネクタイが緩かつたのは何故だい？」

「あらつ、そうだったかしら。わからない」

ヒカルは頭を振った。^{かぶり}「あの時点では、心のどこかで、まだあなたを信じていたのかしら」

ニコツと微笑む“テッド”。

「それにしても、きみには驚かされることばかりだ」

拳銃を腰の後ろのベルトに差しながら、彼は腰を下ろした。そしてヒカルの腕をそつと掴むと、ゆっくりと上下させた。

「痛くはないわ。後で腫れ出すことはあるでしょうけど」

「ふむ、湿布しておくか？ 薬箱はそのまま寝室に？」

「ええ。それより、あなたはどなたかしら？」

と、多少皮肉めいた言い方。「警察官でも凶悪犯でもなかったってことは、もう一人の逃走犯ってことかしら」

すると“テッド”は大笑いした。砕けた椅子の足と、自分の足を括っているネクタイを解きながら言った。

「そいつのことは知らない。俺は違うよ」

ヒカルは無言で問うているような表情を返した。

「俺の名はフィル。フィル・シエルだ。覚えていないのか？ ヒカル」

ヒカルは首を振って見せた。

ティムが尻尾を振りながら、床に座り込んでいる彼女に近付いて来た。だが急に立ち止り、耳を立てた。

その様子を見たヒカルは、“テッド”の口元に手の平を近づけた。

「しっ」

遠くから微かにモーター音がする。

「スノーモービルだ」

と“テッド”は言い、立ち上がった。

警察が来たのだ。意外と早かった。

「どこへ行くの！？ テッド」

裏口へ急ぐ男を見て、慌ててヒカルは訊いた。

「俺はフィルだ。ここに居たら、厄介なことになる」

彼はハリソンのジャケットを着込んでいる。

「やっぱり、あなた……」

「いやっ、違う。俺はこの国では住所不定の身なんだ。ヒカル、スキー板を借りるぞ」

そう言って男は戸外へ出ると振り返った。「タイム！ そいつを
よく見張ってろよ！」

名を呼ばれた犬は、床に倒れたままの女の傍らで低く唸ったあと、
一声吠えて応えた。

フィルは軒下伝いに裏小屋方向へ消えた。

「なによ！ 返すつもりもないくせに！」

8・甦る記憶

クライストチャーチの昼休み。レストラン・クラウンの店先で、油の塊のようになったフライドポテトの切れ端をフォークの先でよけながら、同僚のケリー・ウィルソンの眉が吊り上った。

「結局、何だったのかしらね、その男って」

視線を皿の上からヒカル・スカイファーに移した。

あの事件から、もう一カ月以上が過ぎた。八月も半ばになり、この町一帯の雪もほとんどが解けて、春の気配が感じられるようになった。

ヒカルはあれ以来、警察に何度呼ばれたことか。事の経緯の説明や、テッド・パーカーことフィル・シエルの人相を繰り返し聞かれた。

そこでヒカルにも分かったことがあった。

あの夜、移送車の助手席にいた警官がひとり、怪我を負いながらも生きていたことだ。

つまりその警官は、車がスリップを起こす直前のことも、その後に起きたことも、多少うる覚えながら記憶していたのである。

奥さん、そいつはいきなり空から降って来たのさ。

ビリー・G・ソーントンが言ったとおり、一人の男が雷鳴轟く夜空から落ちてきた。その雷のことはヒカルもよく覚えている。

あれは風呂に入ろうとする直前のことだった。

生き残りの警官の話では、落ちて来た男は本当に裸だったようだ。道路の上にいきなり出現したという。

移送車は急ハンドルを切って草地に横転し、十数メートルも滑った。

エアバッグが作動したが、助手席が下になったため、その警官は身動きが取れなくなった。

しばらくして車の後部側で銃の発砲音が数発あり、後部の扉が乱暴に蹴られる音が何回続いた。ビリー・Gが怪我を負った二人の警官を撃ち殺し、もう一人の囚人とともに制服と拳銃を奪ったようだ。

運転席にいた警官が上になったドアを押し開けて車外へ出たが、その直後に銃声がして、そして静かになった。

直後、草地の向こうに裸の男の姿が見えたが、ベリー・Gの嘲り笑う声がして、また静かになった。警官にはエアバッグが邪魔で、裸の男の顔はよく見えなかったらしい。

後日分かったことだが、運転席の警官は撃たれて路面に倒れていた。制服は剥がされていたが、彼の拳銃は車内から見つかった。つまり、横転して下になった助手席側に落ちていた。

この撃たれて死んだ警官の名がテッド・パーカーである。管轄の違いから、この事実の連絡が約一日遅れとなった。

俺の名はフィル・シエルだ。ヒカル、忘れたのか？

ヒカルは家から立ち去る直前の男の様子を思い出していた。忘れたのかとは、どういうことなのか、いまだに彼女は分からないでいる。

ナプキンを軽く折りたたみ、皿の上においたケリーが言った。「フィリップスかしら、フィリップス・シエル。この辺では聞かない名ね。どうせロクでもない男だわ」と、決め付けた。

ケリー・ウィルソンが電話をかけてきたあの夜、その後ヒカルの家で起きたすべてのことを、彼女が知っているわけではない。彼女が知っているのはマスコミから流れたことだけ。

フィル・シエルが凍死しかかって、庭先に倒れていたこと。
彼がテッド・パーカーと偽ったこと 制服を剥がすときに警察
手帳で名前を確かめたのだろうが、フィルが手帳を所持しなかった
ことは当然のことだった。

家中を暖めて彼を介護したこともニュースになった。
いつとき彼が凶悪な逃走犯ではないかと疑ったことも。

それからビリー・Gが現れ、死闘を繰り広げた……。

だが、ヒカルが凍死しそうなフィルを助けようと必死になっていたとき
裸で温めていたとき のことは誰にも話さなかった。

いや、それだけではない。

フィルが生き返ったとき、知らないはずのヒカルを見て彼女の名
を呼んだこと。

フィルが生き返ったとき、彼が最初に発した言葉が流暢な日本語
だったこと。

フィルが此処をオークランドだと勘違いしていたこと。

これらのことが、どれだけの意味を持つのか分からなかったし、
第一、逃走犯とは関係ないことに思えたので、警察には話さなかつた。

警察はビリー・G・ソーントンを捕まえたことで、ほっと胸を撫で下ろしている様子だった。

ヒカルが伝えたフィルの人相は、明らかにもう一人の逃走犯とは違うものだった。

一時、マスコミはラザ・モーガンがすでに雪の中で凍死しているのではないかとの見解を出していたが、ここに至ってその論調も過去のものとなった。

この一帯のどこからも行き倒れの届け出がなかったからだ。ということは、フィル・シエルも無事なのだ、この国のどこかで生きているとの思いが、ヒカルの胸の中で強くなってきていた。

そして何故か、彼のことを想うたびに胸が熱くなるのだった。

ヒカル、忘れたのか？

フィリップス・シエル、フィル・シエル……！

十八歳の時に中国人のアパートの階段下で気を失ったヒカルは、一旦救急医療室へ運ばれたが、その後一般の病室に移された。

「この点滴が終わったら担当医に診てもらって、そしたら多分帰れるから」

看護婦はそう言い残して部屋から出て行った。

その後、級友が何人かで見舞いに来て、そして賑やかな彼らが帰ったあと、ヒカルは急に睡魔に襲われて、いつの間にか寝入った。

次に目を開けたとき、目の前の白いカーテンが揺れた。カーテンが開けられたから、目覚めたのかも知れなかったが、そこに現れた男を見てヒカルは驚いた。

につこりと笑ったその顔は、ハンサムというより魅力のある^{いか}顔。二十五、六に見えた。

頼もしそうな男の人だった。前かがみになった胸元から、白地に赤い丸をかたどった銀色の鎖のネックレスが見えた。

ヒカルは上体を起こしながら言った。

「ありがとうございます」

「いやあ」

と、彼は照れ笑いを浮かべ、

「ヒカル、大丈夫かい？」

と、握手を求めて来た。

握手に応じながら、ヒカルは訊ねた。

「なぜ名前を知ってるの？」

彼は肩をすくめて見せただけだった。

「あなたの名は？」

「フィル、フィル・シエルだ」

「あはっ、変な名前だね！」

そう言った直後、ヒカルは言ったことを後悔した。ベッドの上で、かつ病院あつらえのパジャマ姿を見られたことに恥じらったからなのか。今でもそれは分からない。

当のフィルはちよつと唇を固くつぐんで見せた。

だが二人には、この時ゆっくりと話す機会を与えられなかった。先程の看護婦と医者が現れたからだ。

フィルは椅子から立ち上がりながら、ヒカルに言った。

「将来、危険な人物が近付いてくるから気をつけろ」

彼はここだけ流暢な日本語で語った。

突然、ヒカルがテーブルの下で組んでいた脚を上げたため、二枚の皿と二組のコーヒースセットが大きな音を立てた。

「ひゃ！　どうしたのよ、ヒカル！」

ケリーは両手でカップを支えた。カップは横になって、くるりと一回転した。

あはっ、変な名前だね！

ヒカル・スカイファールこと、天谷ヒカルに突然記憶が甦った。

名前をからかって笑うヒカルの目の前にいたのは、当時八歳も年上のフィルだった。口をへ字に曲げて、不機嫌そうな表情を見せていた……。

そう言えば、あの頃は日常的にいつもフィルの姿を目にしていたように思う。彼は特にハイスクールの関係者でもなく、学校に出入りする町の人間でもなく、ましてや恋人同士である筈もないのに。

レストラン・クラウンの席を立て以降、ヒカルの心の中で十年に渡る疑問が渦巻いた。

その月の終わりの日だった。

ラザ・モーガンが河口で死んでいるのが発見された、という小さなニュースが流れた。逃走時に上流で川に落ち、雪解けとともに海まで流されたのだという。

その日、ハイスクール時代の友達から電話があつて、ラザが同じ学校の同学年だったと知らせて来た。

失っていたヒカルの記憶が、はつきりと繋がった。

オークランド近郊にホームステイしていた頃、小高い丘の上の公園を渡った先にあつた赤い店先の中華料理店を訪ねたことがあつた。

中華料理屋の二階で言い争っていたラザと中野舞子。

そして、血が流れた。

夢で見た出来事は夢ではなかった、ということだ。

数日後、仕事から帰宅して、軒下に寄せた車から降りた時に、家の中から電話のベルが聞こえた。急いで家のドアの鍵を開け、中に入るとティムがそこにいて、じゃれついて来た。

腹が空いているのだろう。分かっていたが、台所まで駆け寄って受話器を取った。聞こえてきたのは酷い濁声だった。

「ヘイ！ 奥さん。もう緊急なんだ。お願いだよ、奥さん。この手を解いておくれ！」

ヒカルは耳から受話器を離した。激しくなった動悸。手で胸を押さえた。しばらくのあいだ、その姿勢で動けなかった。

「ヒカル！？」

受話器から聞き覚えのある別の声。恐る恐る受話器を近付けた。

「ヒカル、元気にしてたかい？」

「テッド……いえ、フィルなの？」

「イエス」

ヒカルは震える指で受話器を握りなおした。

「ああ、フィル。冗談が過ぎるわ！」

9・オークランド

フィルからの電話を受けたあと、ヒカルは仕事をやりくりして一週間の休暇を取った。

クライストチャーチを二日前に出発し、北島へ渡ってウエリントン経由でオークランドまで、列車とフェリーを乗り継いでやって来た。

ハリソンと結婚したとき、クライストチャーチへ引越して以来だから、オークランドは約五年ぶりだった。

地下のブリマート駅から上がって、明るい日差しが降りそそぐクイーン通りへと出た。

この街の道という道はどこも坂道で、ヒカルが知る限りでも、ただのひとつとして平坦な道などないように思える。街の真ん中を貫くクイーン通りでさえも、海に向かってなだらかに下っている。

その坂の下には舳先をこちらに向けた大きな白い船が停泊し、湾内の中ほどでは帆を降ろしたヨットが、時を刻むような正確さで揺れていた。

九月に入って南半球はまだ春先の季節なのだが、今日は風がない

こともあつてか、日なたは暖かいくらいだ。

通りには近代的な建物と赤い煉瓦造りの古い建物も建っていて、この街を訪れた者の目を楽しませている。

遠くに頭だけ覗かせているスカイタワーは、この街の象徴として欠かせないものだ。

二カ月前に突然ヒカルの目の前から姿を消し、数日前に突然電話をかけてきたフィル・シエルは、この街にいた。

「どうやって、そこまで行けたの？」

と驚くヒカルに、フィルは答えた。

「一度は死んだも同然だ。それを思えば何だつて出来るよ」

「でも、どうやって食べてきたの？ お金なんて持っていなかったでしょ」

「オークランドまで来ればなんとかなる。ここには強い味方の中国人がいるからね」

電話口でそう笑いながら、冗談ともつかない答え方をしたのだ。た。

「中国人？ あら、意外と顔が広いのね。中国人にも知り合いがいるの？」

だが、ヒカルはその答えを待たずに問いかけた。

「フィル、あなたは息を吹き返したときに、オークランドと間違えていたわね。いったい何処から来て、そしてオークランドへ行こうとしたの？」

なぜ、クライストチャーチにいて、そして死にかけたの？ 私のところへ来たのは偶然？」

「おいおい、そんな矢継ぎ早に質問するなよ」

「これが落ち着いていられますか。あなたは何者なの？ わたし、思い出したのよ、あなたのこと。フィル、わたし、あなたとは十八の時に会っているわ。いえ、もっと前かも知れない」

「そうだ！ ヒカル。近いうちに、こっちへ来ないか？ ソンおじさんも居るし」

「誰ですって？」

「中国人のオーナーだよ、アパートの。忘れた？」

ヒカルが思い出したのは、病院のベッドの上で横たわったままの彼女に話しかける、フィル・シエルの姿だった。

そして、血で汚れたナイフが頭の中をよぎり、まだ若かったひと

りの女性の死を思い出した。

「とにかくこっちへ来いよ。詳しいことは、そのとき話そう」

アルバート公園の横をオークランド大学へと続く登り坂のきつさは、市街の道路の比ではなかった。坂の右には石垣がそびえ立ち、その上の公園の蔭が下がって絡んでいるのが目に入る。

左側の崖下にはビルが所狭しとそそり建ち、見えるはずの海を隠している。ここはまるでコンクリートの山道のようにであり、この道を歩こうなどと考える人はそうそう居ないために滅多に人と擦れ違うことはない。

登りきってプリンスス通りを渡ったところで足を止め、ヒカルは懐かしげにホテルを眺めた。

十六歳のときに交換留学することが決まり、どうしても下見しておきたいという母親と、初めてこの街を訪れた。

そのときに泊まったホテルは、当時のままだった。

やがて、大きく右に曲がる坂道を下った。覆いかぶさるような木立の向こうから、教会の建物が姿を見せる。

日曜日だったが、このあたりは人通りが少なく、教会へ向かう数人が坂道のあちらこちらに居るだけだ。

教会の前を道なりに右へ進み、しばらく歩けば、例の中国人が経営するアパートが見えるはずだ。

男の子が騒ぐ声がして、ヒカルは前方を見た。空を指差す子につられ、大人たちも上を見上げている。

教会の遙か上空に人影があり、それが半円を描くようにして接近して来ていた。

口を半開きにして見上げながら、ヒカルは以前どこかで見聞きしたことがある光景だと思った。

それは丘の上の木立をかすめて、少し離れた街路の上に降り立った。

キラキラした光が女　女の姿をしている　の身体を包んでいて、肉体の輪郭はぼんやりと見える程度だ。

その姿はまるで天使のようだ。

その後、天使は二、三歩歩いたかと思うと、また中空に舞い上がり、公園へ登る坂道の途中に着地した。

その様子をヒカルは坂の上から見ていて、ほかの人は下から見上げていた。

天使がさらに登り続けようとしたとき、外の騒ぎに気付いた教会の関係者が、泡を食って駆け出て来た。

薄い布切れ一枚の裸の女を見た彼は、すぐに下へおりて教会の中へ入るようにと、身振りを交えて言った。

天使は坂の下を振り返りはしたが、それ以上の反応を示さなかったため、教会の人はそれをぶつぶつと罵った。

彼女を性質^{たち}の悪い外国の旅行者と決め付けたようだ。この露出狂の女から、街の教会の面前における尊厳を護ることが、彼の義務であると思い込んだのだろう。

彼は坂の上に向かって叫んだ。

「そこから下りて来い！」

天使はその命令を無視して、くるりと踵を返すと、落ち着いた足どりで登りつづけた。

白い肌のアングロサクソン系で、身体つきや顔つきからハイティーンぐらいだろう。亜麻色の髪が丘に吹く風になびいている。

そして、やや青白く引き締まった臀部を、左右に揺すりながら遠ざかりゆく光景が、この教会関係者を烈火のごとく怒らせた。彼は手早く上着を脱ぎ、それを不届きな女の体に着せかけようと、坂道を駆け上がった。

天使は男を振り返りもしなかったし、触ろうとしなかった。上着を左手に抱えた男が、右手で天使の手首を掴んだだけだ。

突如として、小さな稲妻が閃き、破裂音が響いた。教会の人はまるで雷にうたれたように、ひっくりかえった。

彼はそのまま坂下までゴロゴロと転げ落ちて、微かに体を震わせながら横たわった。まわりで見ていた人たちは、じりつと後ずさった。

そのあいだに天使は坂の頂きまで登りつめ、たまたまそこに居合わせた目撃者の一人に興味を持ったのか、足を止めた。

この目撃者こそが、ヒカル・スカイファーだった。

天使が近づいて来るのを見て、ヒカルは息を呑んだ。そして、七月の吹雪きの日に聞いたラジオのニュースを思い出した。

あれは確か、ノースシヨアの岬の灯台に現れた天使の話だった。
やや面白可笑しく語られていた……が、今こうして目にしてみると、
脅威にさえ思えてくる。

そのうち何処かの物陰から、テレビ局のアシスタントディレクターが
ブラカード片手に飛び出て来て、『いやいや、どーもー。どう
です、驚かれましたか!?』という馬鹿馬鹿しい展開に巻き込まれ
たぐらいで済めば良いのだが……。

坂下に到着したのは警官数人だった。息せききつて駆け上がって
来て、天使と対峙した。

見物人の一人が叫んだ。

「スタンガンを隠し持っている。気をつけろ!」

すると、別の者が興奮気味に喚き立てた。

「いや、違う! 武器など何も持っていなかった」

警官の一人が、毛布を天使の足もとへ投げて言った。

「とりあえず、それを着ろ!」

天使はヒカルを振り返って訊いた。

「あの人たちは、何を言っているの？」

なんと、それは日本語で語られた。

ヒカルは驚き、目を丸くして、あの酷く寒かった夜にも同じような状況があったことを思い出した。

一瞬あつたのちに、気を取り直したヒカルは忠告した。

「あの人たちは、あなたの裸が困るのよ。すぐに命令に従ったほうがいいわ。さっきの人、どうしたの？ あなた、殺してしまったの？」

「彼は死んでいない。少し麻痺しただけよ」

「でも、もう逆らわないほうがいいわ。あの人たち拳銃を持っているから。ほら、見える？ 皆が腰に下げている物が」

すると天使は、いちばん近くにいた警官に向かって、
「それを見せてくれませんか？」

と、にこやかに近付き、頼んだのだ。

そして、手を伸ばした。

日本語を解さない警官は、その手を見て身構えた。

その途端、信じられぬほどの俊敏さで天使は動いた。乳房が揺れて、警官の手から拳銃をもぎ取った。

ダーン！

足元の土が弾けた。天使の指が引き金を引いていた。

警官隊は一斉に坂道に突っ伏した。いや、見物人も皆伏せた。一瞬、静かになった。

「ああ！」

と、ひとり声を上げたのはヒカルだった。

硝煙が立ちのぼる銃口を、天使が興味深げな表情で覗いていたからだ。

ダーン！

二発目の銃声に、皆が十字を切った。

だが、天使はそこに立っていた。弾が顔から逸れたのだろうか、

本人も驚いた顔付きでいた。

あっけにとられた警官隊　警官の数がいつの間にか増えていた
が見守る前で、彼女は拳銃をしげしげと検分し、面白そうにあ
ちこちを弄くっている。

警官達はずるずると後退りし、しきりに十字を切った。坂下に停
めた警察車両から、無線でやり取りする声が忙^{せわ}しく飛び交った。

天使の斜め後ろで見ていたヒカルが声をかけた。

「ね、ねえ、大丈夫なの？　あなた」

「武器を捨てろ！」

と、気を取り直したように警官が怒鳴っている。

「彼らはなにを言ってるの？」

その問いかけにヒカルが答えようとしたが、警官の警告が重なっ
た。

「武器を、捨てるんだ！」

天使は振り返りざまに声を荒げた。

「言葉が分からないって言ったでしょ!？」

警官達は、彼女の語気に驚いた。

「いいから武器を捨てるんだ!」

するとあるうことが、天使は銃口を坂下へ向けた。警官隊の銃口がすべて坂上に向いた。

ダダダーン!

ダーン!

避ける間もなく、ヒカルは腹部に強い衝撃を受けて倒れ込んだ。

10・教会の上

天に昇っていくような浮遊感があって、ヒカルは薄目を開けた。青空が見える。

きっと天国へ昇っていくところなんだろう。ハリソンに会えるかも知れない。彼になんて言おう。

一種不思議な目つきをして、天使がヒカルをじっと見ていた。なにかこう、ヒカルの方からアクションを起こすことを待ってでもいるかのように。

だが、ヒカルはどうしていいか分からなかったので、ただ静かに横たわったままだった。

天使はなにか言おうとでもするように、ちよつと口を開きかけたが、思いなおしたらしく、つと後ろを向くと裸の背中をヒカルに見せた。

わたし、どこに寝転がっているんだろう。

ヒカルは、なんだか事情も良くわからずに連れて来られた子猫のようだと、一瞬思う。このまごついた気持ちをとりつくるおうとして、ヒカルはかすれた声を出した。

「じいじは、どこかしら？」

「わたしのうちよ」と天使の声。「もちろん、一時しのぎだけれど」

まわりに壁もなければ、天井もない。見上げれば青い空。横をゆつくりと雲が流れている。

ヒカルは興味いっぱいな子猫のように、よく見ようとして上体を起こした。

「わあー！」

足元には床もなかった。眼下に教会や家々の屋根が豆粒のように小さく見えた。

慌てふためいたヒカルは、天使の足にしがみついた。それでは心許ないので、背中に顔を押し当ててしがみ付く。

ヒカルは四方八方が見渡せる中空に浮かんでいた。だが、風は感じない。太陽の熱も感じない。透明ななにかに包まれているかのようで心地良い。

「そろそろ離れてくれない？」

そう言われたヒカルは、あることを思い出して慌てて天使から離れた。

「なんでわたしは痺れ^{しび}なかったの？ あの教会の人みたいに」

天使は無言だった。

「あれは、なんていうの？ バリアーみたいな？」

天使は無言でいる。

「で……あなた、人間なの？」

まるつきり人間みたいに見えるのだが。

「どういう意味？」

と天使は言い、そして直後に、

「はああ」と何かに思い至ったように、

「仕方がないわね」と言った。

天使は僅かに微笑み、頭を前に下げると、

「わたしの正体……見る？」

と籠った声を出しながら、亜麻色の髪の中に両手を差し入れた。

ヒカルは突然の申し出に驚いて、上体を引いた。

二、三秒後、天使の笑い声が気に障るほど響き渡った。天使は手で乳房を揺すりながら、からかう様な口ぶりで言った。

「これ、本物よ」

ヒカルはまだ疑心暗鬼な目付きで相手を見た。

「じゃあ、どこから来たの？ 日本語はどこで覚えたの？」

この南半球で、日本語を流暢に話すアングロサクソン　そのように見える　に出会ったのは、これで二人目だった。フィル・シエル、そしてこの天使だ。

「八〇〇年後から……」

それを聞いて、ヒカルは吹き出しそうになった。だが、ついさっき彼女が天から降りて来たところを思い出して、表情は複雑に変化した。

「わたしは古代の料理や、飲物を味わってみたい。建築物も見たい。この時代の性的風習にも興味があるわ」

「ねえ、八〇〇年未来からってことは、2812年ってことよね？」

「あなたがたの暦法ではね」

ヒカルは溜息をついてから、自分の腹を見た。つい先ほど、撃たれたことを思い出したのだ。忘れていたほど腹のどこにも傷跡がないし、痛みはなかった。

「どうやって直したの？」

天使は全く関心がない素振りで、背中を見せていた。いや、しきりに何かの作業をしているようにも見える。
ヒカルはさらに言い募った。

「すごいわよ。どうやって直したの？」

天使は煩そうな顔をして振り返った。まったく愛想もなにもないが、その顔付きからは未成年ではないかと思わせた。

「治療をしてから、どのくらい経ってるの？ わたし、ずっと眠ってたのね？」

そう言ったヒカルは、突然あることを思い出した。「大変！ 行かなくちゃ！」

フィルが居る、中国人のアパートへ行く途中だった。

「経ってない」と、天使は答えた。

「……たつてない？ なにが？」

「経ってない。あなたが死にそうだったし、ここで言葉が分かるのは、あなただけみたいだったから……」

どうやら天使は、数分、多めに見ても数十分で、ヒカルの銃創を治したと主張しているらしかった。

足元に下界が広がっている。いつだったか乗った観覧車の最上段よりも高い。ヒカルは目が眩んで、また天使にしがみついた。すると天使は言った。

「わたし、この時代の風俗に興味があると言ったけど、あなたと抱き合っつもりはないわ」

なので、ヒカルはまた彼女から離れた。そのとき、なにかが視界から消えた。

『おや？』と思って、顔をまた彼女の体に近づけてみた。

天使の脇の向こう側に、モニターのような画面がある。ヒカルは何度か顔を近付けたり、離したりを繰り返した。どうやら、天使の

すぐ近くにいると、様々な機器が見えるようだった。

「あ、ラグビー」

と、モニターを見てヒカルは言った。

天使はニュージーランドのテレビを視聴していた。昨夜のオールブラックスの試合の再放送だった。

「さっきの騒ぎはニュースになっていない？」

天使はチャンネルをすばやく変えて見せたが、どこも退屈な料理番組とか、アメリカのホームドラマだった。

「ほら」と、天使は下界を指差した。

先ほどの坂の上では、突然姿をくらました一人の女と天使を捜して、警官たちが検分中だった。騒ぎを聞きつけたマスコミの車がやって来たばかりだった。

「訊いていい？」とヒカル。「だとしたらあなた、なんでオークランドくんだりまで来たの？」

これは当然出てくる質問だった。未来から時間旅行でやって来た

としたら、ローマとかアテネとか、いやこの時代ならニューヨークとか東京だろう、ふつう。あるいは上海とか。なぜ、ニューヨークなのか？

すると、天使の答えがふるっていた。

「わたし、あんまり細かく考える性質たちじゃないのよ。古代の歴史も真剣に勉強しなかったし……。この場所にわたしをもたらししたのは、偶然以外の何ものでもないの。ついでに言えば、この日に現れたのも、ただの偶然」

それを聞いてヒカルは驚いた。天使はつづけた。

「あら、それってそんなに変なことかしら。旅行先が気にいらなければ、その場で変更すればいいだけのこと。そうじゃない？」

なにか思い当たったとでも言うように、彼女は一本指を立ててニヤリと微笑んだ。「ひとつ学習したわ」

「え？」

「あなただけなのか、あなた達なのかは、これから分かるんだろうけど、計画を入念に立ててからでないと、一步も前に進みそうもないわね」

「まあ、そうすれば誉められたりするけどね。で？」とヒカルは訊いた。「ここは気に入ったのかしら」

「まあね。あなたとは言葉が通じることが分かったから、もう少し案内してもらおうかしら」

ヒカルは急に心配になった。

「もう少しって、どのくらい？ わたしは友人のところへ行く途中だったんだけど」

天使はそれについては無言だったが、
「ほら！ インタビューしているわ」と言った。

モニターの中で、マイクを向けられた男が話している。

「若い女が空から降りてきて、教会の上からこう」と身振りを交えて、「近付いて来て、あの木立をかすめて路上に降り立ったんだ」

「空から！？」と、レポーターはカメラに向かって目を剥いて見せた。「空から降りて来たんですね！？」

「そ、そうです」

「どんな乗り物で？」

男は首を振った。

「裸で降りてきたんだ」

と後ろにいた男が割り込んだ。興奮気味だった。「裸だよ！ あれはヴィーナスだ。信じられるかい？」

「いや、とても」

「光り輝いていたが、体の輪郭はよくわかった。目が眩むかと思うほど綺麗だったよ。胸もあそこもなあ」

と、男はうつとりとした顔を見せたが、隣にいた連れの女が、その男の手の甲をピシャツと叩いた。

まだインタビューは続いていたが、ヒカルは一步下がって　　するとモニターも音声も消えた　　あらためて天使をしげしげと眺めた。

金髪まじりの亜麻色の髪。肌理の細かい艶々とした肌。豊かな胸、乳房の先でつんとした乳首。細くくびれたウエストの下で存在感を示している臀部。そして太腿の付け根に申しわけ程度に生えた陰毛も亜麻色だった。

「訊いていいかしら？」
と、ヒカルは言った。「なぜ裸で来たの？ 恥ずかしくはないの？」

天使はゆつくりとモニター方向へ手を伸ばし、何かを操作したようだった。テレビ放送を消したのかも知れない。

ヒカルには見えないけれど、天使は腰掛けに座っているような格好で、体をこちらに向けた。

「あなた、わたしの体に興味があるの？ さっきも言ったけど、抱きつかないでね」

八〇〇年も経てば、『恥』の意味も変わるのだろうか、などとヒカルは思った。

胸も股間も晒して座りつづける天使を見て、ヒカルは痺れて坂道を転げ落ちる破目になった、あの教会の人と同じ気分を襲われた。今いる場所は、あの教会の遥か上空のようだが、地上からは見えていないのか。

「名前はなんていうの？ わたしはヒカル」

「レイナ」と、天使は答えた。

「天使レイナ、日本語はどこで覚えたの？」

「テンシ？ ニホンゴ？」

「日本語とは、あなたが話している言葉のことよ」

「それは生まれたときから」

「そうなんだ。英語は話さないの？ ここでは英語が公用語なのよ」

「そう」

「どこから来たの？」

「どこ？」

「どの場所から来たの？ 地球上の」

「東経百三十六度四分、北緯二〇度二五分」

「え？」

「むかし、オキノトリシマって言われていた所だって教わった」

そんな所に住める場所があったつけ、などと不毛な想像をめぐらせた。

急に、ヒカルは八世紀も未来のことを考えても仕方がない、と思うようになった。なぜならば、鎌倉幕府の頃の人間が、二十一世紀に思いを馳せるのと一緒にだからだ。そもそも無理なのだ。

それからしばらくの間、二人は無言だった。

ヒカルはある心配に思い当たって、レイナに頼み込んだ。

「また、この国のニュースを見たいんだけど」

「なぜ？」

「おねがい！」

ヒカルは手を合わせた。でも、レイナは微動だにしない。「だめ？」

「なに？ 今のしぐさ」

と、別のことに興味を示した。

「しぐさ？」手を合わせて、「これのこと？」

レイナは頷いた。

「頼みごとよ。人になにかを頼むときにするのよ。もっともこれ、日本人だけかも知れないけど」

レイナが向こうに腰をまわして、手を前に差し出した。
彼女にびったりと近付くと、ニュージーランドのニュースが目
飛び込んだ。

やはり相変わらず、ニュースは教会前の騒ぎ一辺倒だった。意識
を失っていた例の教会関係者が、病院のベッドに横たわったまま、
レポーターから質問攻めにあっていた。

教会前にいるレポーターに画面が切り替わり、彼は裸の女ととも
に消えた、もうひとりの女性の身元を局が一丸となって捜している
と話した。

「や、やっぱり！　まずいわ！」

ヒカルは懇願するように両手の指を組み合わせた。

「なにがマズイの？」

「わたし、下へ降りてったら、なんて説明すればいいのかしら」

警察も、テレビ局も、ラジオ局も、新聞や週刊誌も、侮辱された
と思っっている教会さえも、ヒカルを見つけたら総出で追っかけて来
るに違いない。

裸で街中を歩きまわった不届きな女とともに姿を消したヒカルは、
山から下界に迷い込んで、追っ掛けまわされるサル同然だ。

ヒカルの心臓は鼓動を強めた。

眼下では、真上に昇った太陽の光をさんさんと浴びた人々が、右
往左往している。

目の前にレイナが来て、ぺたりと座り込んだ。

「たぶん、そんな心配は無用だと思う」

「……なぜ？ どうして？」

「すぐに分かるわ。それに説明を求められるのは、わたしだわ」

ヒカルは大きいため息をついて黙り込んだ。今頃は遙か離れたク
ライストチャーチの自宅に、警官やテレビ局の連中が押しかけてい
るかも知れない。

「近所や知人にも大変な迷惑を掛けているかも知れない。ケリー・

ウィルソンの吊り上った眉が目には浮かんだ。
ヒカルは顔を上げて言った。

「あなた、さつき気儘な旅行者みたいなこと言っていたけど、ほんとに？」

レイナが無言で視線を送っている。ヒカルはつづけた。

「だって例え、八〇〇年も時間が進んでも、旅にはお金が掛かるでしょうに。旅っていわば時間を切り売りするような商売よ。それとも、こんな手の込んだ乗り物が、あなた個人の所有物とでも言うつもり」

「いいえ、違うわ」

意外や、レイナはあっさりと返した。

「ほらっ、あなた、歳いくつ？」

「十九」

「ほらっ、まだ子供みたいなものじゃない」

すると、レイナは今までになく真剣な顔付きで、英語がほとんど

話せないから少し付き合っで欲しい、そう頼んできた。

「通訳機みたいな便利なもの、あるんじゃないの？」

ヒカルがそう言ったのは、なかばからかい半分のもりだった。

「時代が違い過ぎる。意味不明な単語が多くて厄介なのよ」

ヒカルは、これじゃまるで旅先での保護責任者だと嘆いた。

「そろそろ戻りましょ、お姉さん」

「ヒカルよ、お姉さんはやめて。どこへ戻るの？」

「元の場所よ」

公園の丘の下、道路を渡った歩道で見守る人々の背後から、ひとりの男が近づいて来た。彼は一発目の銃声でアパートの部屋を飛び出し、二発目の銃声を走りながら耳にして、今、乱射された直後の丘の上を見つめている。

硝煙が風に流され、その匂いが鼻を突く前に、
「ちくしょう！」

と声にしたフィル・シエルは、警察車両の横をすり抜けて丘のふもとに走り寄った。

彼を制止する声がして、一人の警官が駆け寄ったために、フィルはそこに立ち止らなければならなかった。見上げると、斜面に伏せていた警官たちが一人二人と立ち上がった。

彼等は注意深く丘の上に近づく。頂上に立ったとき 誰であるかは識別できないが 女の顔が見えた。

その女に向かって警官たちが銃を向けていた。さかんに「伏せろ！」と命じている声が、風に乗って流れてくる。

しばらくすると、二人の女が立ち上がった。亜麻色の髪で裸の女、そして黒髪の女だ。

警官の一人が、大判の毛布を恐る恐ると裸の女に渡した。彼女はそれを肩から羽織った。

彼女たちは警官に取り囲まれ、丘を下りて来た。警察車両に向かう途中、レイナは見物人の中にいる一人の男を認識した。

フィルは、レイナから彼女の後ろを歩くヒカル・スカイファーに視線を転じた。だが、ヒカルはうつむき加減でいたため、彼の存在には気付かなかった。

まわりの警官を意識したためなのか、フィルがヒカルに声をかけることはなかった。

やがて雲間から陽がのぞき、あたり一面の空気を午前中の暖かいそれに変えた。

四方八方からテレビ局ほかマスコミ関係の車が押し寄せ、これ以降は、この国の空気をかつてないほどエキサイティングなものに変えていくのだった。いや、世界中を。

11・東京

アルバート公園の丘の上での一件以来、ヒカルは警察の事情聴取はもちろんのこと、あらゆるマスコミに追い掛けまわされた。それは彼女がレイナの乗り物の中で遙か下界を見ながら、これからの自分の身を案じた、そのとおりになって行ったのだった。

人々の関心がレイナだけに向けられるようになるまでは、七十五日とまでは言わないまでも、一カ月はゆうに掛ったのである。

ヒカルは疲れ果てたが、勤務先に長期休暇を貰うには大して手間は要らなかった。ボスもケリー・ウィルソンも同情を寄せてくれたからだ。

そんなことから、ヒカルが日本に一時帰国することに決めたのは自然な流れだった。急に母親に会いたくなった。

東京国際空港の到着ロビーで、目の前にフィル・シエルがまた現れたときは、もう別段奇異に映らなくなっていた。

ヒカルはフィルとテレビの前に座った。母・天谷和子あまやかずこが切符を手にして戻って来た。和子には、フィルのことは昔からの知り合いで、ボーイフレンドみたいな者だと紹介した。

和子は科学雑誌の編集に携わっている。ヒカルが幼い頃に夫と死別し、再婚することもなく、留学した娘を陰で支えてきた。その為なのか、見かけと違って男っぽいところが見え隠れする。

見ていたニュースについて、和子も関心があるものと思い、ヒカルは言った。

「例の未来から来た女に関する最新ニュースを見ていたの」

「誰のこと？」と和子。

「レイナ・ランスロットよ。彼女、日本へ来るんですって」

「誰なの、それ……？」

「こつちじゃ、その話はそれほど有名じゃないんだろ」と、フィルが口を挟んだ。

だが、職業柄なのか個人的になのか、和子の好奇心が頭をもたげたようだ。

「いったい何の話？」

「その女はマヤの迷信を煽り、ひと儲けをたくらむ輩かも知れないですよ」

フィルのその言葉を聞いて、ヒカルは目を丸くした。どうやら彼

は、この件を肯定的に話すつもりがないことが分かった。

フィルは言った。

「彼女が自称するところによると、八〇〇年後からやって来た観光客らしいですね。最初はニュージークランドの教会前に素っ裸で出現して、彼女に服を着せかけようとした教会の人を指一本で気絶させたと言われています。」

警官から楽々と拳銃を奪ったとき、一斉射撃を受けても平然としていたとか。それ以来、彼女はありとあらゆる種類の混乱をまき起こしていますよ。」

ヒカルによつて最初紹介されたときから、フィルの流暢な日本語に驚きを隠さなかった和子は、エスカレーターで下りる間も、話しつつける彼の説明を聞いていた。

「くだらん悪ふざけですよ。いや、あくまでも私見ですけどね。」

とフィルがつづけた。「世界が十二月のある日で終わるという迷信に退屈した何処かの低能が、八〇〇年未来から来た訪問者を演じようと思ひ付いたに決まっています。」

しかも、一部の人々はそれを真に受け始めている。いつの時代も、終末論的な話はマスコミ受けするし、また話を大きくして儲けようとする奴等もいる。」

レイナの乗り物の記憶があるヒカルが、
「でも、本当に彼女がタイムトラベラーだとしたら？」と、話を向けた。

「もしそうなら、ぜひ会ってみたいものね」
と、和子が口を挟んだ。「時間旅行に関する質問に、解答を与えてくれるかも知れないわ」

そう言って、和子はくっくつと笑った。そして、突然真顔になった。なにが滑稽なものか、という顔付きになり、和子は言った。

「あなたの言うとおりよ、フィルさん。その女はただの詐欺師よ。
なぜ、そんな女の噂で世の中が時間を浪費しなければならないの？」

「なぜって、彼女が本物だという可能性があるからよ」

と、エスカレーターを先におりたヒカルは、立ち止まると髪を揺すって言った。「その後のインタビューを見ても、ただもの只者ではないわ。未来のことを、まるで実際にそこにいたことがあるように話すのよ」

「その女は、いつ現われたの？」

「一カ月ほど前」

「なぜ、わたしには何も教えてくれなかったの？」

ヒカルは肩をすくめた。

「この話題には関心がないのかなと思ったのよ。この一カ月、日本でも少しはニュースになった筈だわ。でも、母さんはメールでも電話でも、何にも聞いてこなかった」

「というか、最近はテレビの傍にも寄りついたことがなくてね」

「じゃあ、母さんも、そろそろ世間の話題についていけないとね」

隣で話を聞いていたファイルは、少し不機嫌に見えた。和子が時間旅行者に会いたいと言ったとき、彼の顔が苦り切った表情になった。何故だろう、とヒカルは思った。

2012年の十二月二十二日頃になれば世界が終わると、人類滅亡説に少なからず関心を寄せて話したファイルが、なぜ同じ不合理の代表みたいな最新情報を打ち消しにかかるのだろう。

だが、未来から来た少女に対する和子自身の気持ちは中立的なものだった。もちろん、時間旅行者というふれ込みは、和子にとっては噴飯ものだろう。

時間を逆行するという、その実現の不可能性を説いたアインシュタインの説にも反する。アインシュタインがすべて正しいと決め付けるのも問題かもしれないが、少なくとも今の時代では、光よりも速いといわれる粒子タキオンも確認されておらず、ワームホールの存在も確認されていない今、そこから飛躍した説を唱えても賛同を得るのは難しいことだろう。

だが、ヒカルは以前レイナと話していたときに考えたことを思い出していた。

『鎌倉幕府の頃の人が、2012年に思いを馳せるのと一緒に……』
どんな世の中になっているかは、想像もつかないだろう。

それでも、タイムトラベルに成功したという少女の主張を、朗らかに受け入れられるわけではない。

フィルがヒカルの母親に対して、その話を否定的に話したのも、ただ単にそういった理由からかも知れない。

しかし、和子はすでにその“ペテン少女”のことをもっと知りた
い気分になっていた。その少女はニュージージーランドの警官隊の一斉
射撃から、何らかの方法を用いてヒカルを守ったらしい。

ヒカルが惹きつけられるほどの少女なら、なんによらず母親にも
興味があるものだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3739w/>

時を嗤う少女

2011年10月9日15時54分発行